

豊城世譜

二

共貳

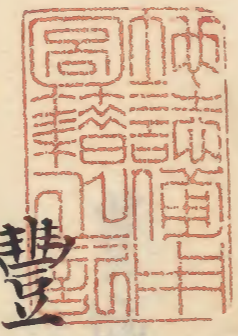
庫	文	閣	内
一五	三六	三五	和
函	五五	八	
三架	二册	號類	

90

内閣文庫	
番號	和 36558
冊數	2 ( 2 )
函號	151 135



圖  
90



豐

城世譜坤

列藩目錄

安岐城 國東郡杵築管内

富来城 國東郡杵築管内

高田城 國東郡

日出城 速見郡

府内城 大分郡

臼杵城 海部郡



佐伯城 岡城 森出郎 隈田城 豆田城 高松城

海部郡 大野郡 玖珠郡 日田郡 日田郡 大分郡

豊城世譜 四番目録

豊城世譜 坤

安岐城 國東郡 杵築管内

大友左近將監能直の十二男田原中務少輔後左近藏人泰弘田  
 原別府并安岐郷城分領一食邑とを田原と城を築き居之田原  
 と心氏とす後安岐の京泊と城を築き居之是田原一統の上祖  
 也國東右六率田原の初領と云々一宗如常西田原とわかれ又吉弘氏  
 別是ぬ天正年中田原右馬次親貫は嫡家松二代相續田原一統の系前  
記野籠の次本也  
清泰の謗も在  
故多しと云 大友親統の令子新九郎親家を田原常陸助と改親  
 貫の遺跡を承是於三代目也親家を中興門司の城を好むと中國の押  
 とす門司助とぬ由と改之親元年壬辰兄大友親統共朝鮮に出  
 陣大友家改易後京泊城空城と成之禄二年甲午大友親秀吉と豊  
 後國と心人子死す無子と云ぬ助直陣和号  
半法 豊方五千石を領安岐

城下郡

一本三方五斗石二万石ハ江州ノ内領也 ○武家其地記ハ八万石あり外の國ノモノ

○安政城ノ郡持大分郡大野郡教直ノ海軍の

武家

然其の祖は源平評判曰然其法即直実の父は平忠盛ノ孫也

直実二弟の時乳母の懐に抱き一族を託す氏花園より四の堂より養

育せしむ氏園力量も方今越ゆる於公承の時忠盛のより負ふ

り多くの人を害す直実を養育す族高名を感し四の堂の旗

頭より前たる法義朝も属し在京するも平法の軍起り忠

源太義平のよりを撰出されし十六騎の勇名也今我ら

名を勵し二通の感状を賜り姓ハ平宗とし源氏厚恩の民意

後不道蓮生法師より元二年丁卯九月於京里五辻化以

後系統不詳直陳は関白秀次公の伯人然其内膳早の弟也

直陣ハ大岡ノ属一軍忠と畫一登庸一々安政の城より成一か去ん朝鮮

或記曰熊谷姓者桓武天皇  
土代平治郎大夫直自其子  
本郡直正佐則流刑武州熊  
谷自是以地名号然及後直  
貞為平忠盛被害于時詔  
直実二歳捨置京都母許  
坂本大夫久下權頭時春有  
處可殺害極直實父母叔清  
盛弟経盛三説訴テ助之乳母  
直実懐入而尋上族逃然及倉  
兄許成長也  
余ハ平法ノ通也  
又白蓮久三壬子十月冬權頭  
直光ト平武州地無石領境  
鎌倉依根原是時詔不戒  
於其場被刀難髮走上方頼  
朝止之遣使求所遂不出  
至京師黒谷居法然上人法  
才多法名蓮生

征伐の時諸將の剛臆を告る役人成渡海せし其後毛利中と戦

ひ多及び此分あり退放せし石田三成り智年此は江州依和山と赴忍

居りて其者本年庚子の秋石田三成を圍み其地領と與し浪州大垣の城

野よりし其間々京軍利あり敗れ其和泉守宗純と其高橋右近

直元種より討し其安政城は叔父然其地あり其家老然其佐助曰

為仁在是門回苗法即助城と守り其年九月十日黒田如水軒圓清中

重信ハ大勢を以て城を圍む城よりは地の形莊南北ハ長く申ハ海東北は

岩石多く徑行し西有平地也其間々城とあり其地三向斗り其地上下乾

の方より大橋あり大守堅し向門の岩石多石垣築之九惣勢七百餘騎

要害の堅固の城也如水ハ城より捨所を向り西南の言き其原野より陣と

加りし其城より三千騎平と其申し其水の陣より近附陣列と見計其者

其討めんと其勇し其を以水軍師ハ其知りて日物見と討し軍法あり其

吾人の陣中と出立つたは其地を犯し軍の恩讐するを爲依之間迫く  
其ふ敵と見あはれ馳ある者あり一戦し其陣は再と焚せ夜廻張  
番の敵軍より知あり斯く其地を攻す本付の兵と進む軍一と粟山四  
右馬と後殿と定見高き馬之九馬肥地利右馬小山其高馬三人と  
守て如水ヤクは其地を攻る軍は流石男の者もいと見申宛て表  
成引拂時の追討する事あり向の山陰より伏兵一其陣と待討るは  
又岡田の物相地を治山松地を中田とす其四人の山姓共を隠備し  
先急高馬せよと知あり依之高き地隊山林の樹下の兵士共黒田元  
馬の軍を右江見彦右馬相屋茂高直高加右馬門関六右馬を卒  
人耳りを粟山四右馬先より使陸地一使陸備ハ二ツ子割小知と待  
夜明前より向山の麓西本と云所より待伏し相関の樹林待居り明  
十三日未ぬ水の陣本付の方より馬を進む案のふく徳右治助と大將

ト一甲士五拾人雜兵三百余人城より池出追急し伏兵あり人事を計り  
西本の下より高き北西の方へ池より急に陸地攻る村甚高馬急し足輕を  
中一陸地をおせられ其地を陸地と一面を備へ暫く陸地せり合す其如  
水の山姓本多よとあり一高き近出高馬右馬相地平治岡田  
三四右馬と引連関と上右方より突急し陸地を攻る城將然高治  
郎助と其場を攻り又岡田三四右馬と馬より突急し首を其地の南  
あきより山ありと限りし追急し高馬定見高馬と其地方味方を助  
けんといふ三平孫を命り馳事し川向は傍りり粟山是と見申其所より引  
行は敵又附事らん川を渡り討たれし其地を振るれ其地を攻る其高  
花倉元右馬右馬の回射を中田守事し其地を攻る其高馬の兵士二百人池  
降り戦ひ其高切崩され其地を攻る其高馬の兵士二百人池  
ハ二足も列す其戦後サは討死し進歩を又追事三所計りあり其地を攻る

軍目付諸軍の働を注ぎあり、これより、菅野中、中より、岡田三郎中、は、敵將  
然るに、助を討ち、因り、感状を賜ふ、討ち、甲首二平、級、雜、兵、首、二、平、級、中  
津、名、田、口、より、きた、李、忠、一、と、送、り、り、斯、あ、中、より、中、田、中、より、室  
掛、ん、と、肥、後、の、肥、後、利、在、馬、中、田、を、討、ち、時、刻、早、く、と、云、り、れ、在、間、入、り、馳、出  
す、加、惣、兵、隊、を、追、ひ、つ、敵、を、追、ひ、つ、り、水、中、より、大、に、怒、り、中、田、中、より、室  
中、より、武功、有、者、の、功、を、賞、し、時、刻、と、早、に、突、進、し、つ、り、多、く、の、敵、を  
討、滅、し、つ、り、將、甲、中、より、あ、り、諸、卒、の、軍、法、を、西、に、見、せ、り、為、謀、す、中、一  
我、の、老、隠、を、れ、助、命、す、つ、り、と、重、傷、を、お、つ、り、向、つ、り、早、天、より、大、軍、を  
以、城、を、圍、仕、寄、せ、り、城、中、に、押、寄、り、茲、彼、知、り、り、大、矢、お、つ、り、陣、の、西、の、方  
に、山、居、接、接、を、揚、相、國、の、陣、を、討、つ、せ、又、之、を、簾、陣、を、圍、ひ、つ、り、兵、を、推、  
く、し、能、書、く、物、を、數、多、お、つ、り、つ、り、又、海、上、より、數、艘、の、兵、船、を、遣、り、  
海、陸、回、り、り、周、攻、揚、を、攻、つ、り、り、り、然、る、に、如、記、を、城、中、と、下、知、

早、く、中、より、如、書、り、り、大、矢、を、お、つ、り、如、廓、を、お、つ、り、城、中、を、城、中、を、思、ひ、云、  
城、兵、を、討、つ、り、森、孫、左、馬、右、衛、門、尉、水、の、家、老、毛、利、多、重、衛、門、方、内、道、  
と、曰、ふ、如、記、を、不、和、強、を、お、つ、り、つ、り、あ、り、降、参、仕、り、又、六、城、を、放、火、す、  
つ、り、つ、り、成、り、成、り、成、り、成、り、つ、り、つ、り、云、送、り、毛、利、多、重、衛、門、方、内、道、  
如、水、曰、傳、ふ、之、に、如、記、を、意、根、有、れ、に、送、り、人、を、他、を、成、つ、り、道、理、を、一、と、云、  
の、降、参、團、以、り、つ、り、城、放、火、す、つ、り、つ、り、老、人、女、童、死、傷、多、う、と、つ、り、  
所、詮、區、を、お、つ、り、也、と、兵、衛、を、先、に、つ、り、馬、杉、森、右、馬、右、衛、門、尉、を、呼、出、  
汝、は、外、記、と、書、き、知、る、成、り、つ、り、あ、り、汝、より、如、記、を、使、者、を、送、り、城、中、に、送、  
の、者、あ、り、斯、く、と、云、城、中、に、送、り、つ、り、城、中、に、送、り、つ、り、外、記、を、城、中、に、送、  
人、を、遣、り、つ、り、城、中、に、送、り、つ、り、城、中、に、送、り、つ、り、城、中、に、送、り、つ、り、  
と、送、り、城、中、に、送、り、つ、り、彼、森、右、馬、右、衛、門、尉、に、前、に、柳、伊、右、衛、門、尉、に、  
勅、し、古、傍、守、の、知、事、を、故、也、外、記、を、城、中、に、送、り、つ、り、城、中、に、送、り、つ、り、

筆を評定す或上方の軍未聞す勝敗も亦又人分知れ  
降ふは思ひあはし若し中は敵方も痛攻無くはまを一期と一討死  
せん何の仔細有らざるは又一方は此理書然るも後詰を待た  
ざるは此大勢を圍む何の時を待たぬ唯敵の扱は任せざるは  
云々の如記すは西條若一理あり去れは上方の一右者とすは  
と降ふは一總首は遠く下は淺猿かたし又何を頼もはざるは  
の人を亡さん謂はれ一所詮唯我を人切腹して諸軍の命助らんは  
あらはれ義を思ひ名を恥者もは是は思ひはるは軍は也誰者  
時の大将を殺て幸の命を助り出さる事やめは皆思ひ極死を討  
死せんと互の論も果さるる時は平如と幼丸馬とふ者をあて申  
るは外記殿の作も幸の志も何事もあはれはるは上を某敵  
陣へ死出首の供より一敵将より計ひを聞はるは思ひはるは

あきとくは供は暫く矢止とをいぬ水の旗也ををりては城中の  
諸士の命を以助は然る外記は陣頭は羅出切腹一諸人は皆り  
度は此を赦免とせんは是使者を申す一城速はるは如水字を思  
れ妙也城兵の所存も其城を治す事は自もあはれは是は我と  
る人と扱はは皆く是物家人とすは一他國一趣く志の者には財  
志く元徳也情も思ふは是は一とあり我又此城を圍む事全  
を害せんともあはれ唯所この敵城を平治せんは是は外記  
命をも絶するもや早く是は是は一城中の者一人も城は一命を助  
るるは是者速要有るは是は是は是は是は是は是は是は是は是は  
の下知と傳はるは是は是は是は是は是は是は是は是は是は是は  
の事も是は是は是は是は是は是は是は是は是は是は是は是は  
尉董至于時城兵數少水の先より富事の城へ是は是は是は

傳曰然石外記は女水一礼と述す上方へ登りて交関を東軍破りて  
然石内を直達し濃州大垣の城を討死し少暫く事終りて  
送留世上穂より一後最前へ下りりれは女水先物を忘却せり  
余牙黒田圖書より一後最前客の傳より一と述す

富来城

一本飛来氏

國東郡杵築管内

大友家從富来氏代々居城元祖は富来雅樂助忠政一政正壽とす  
國東郡瓦形より大友畠因幡守親時の庶子なり正安元承仁七乙亥  
時忠政を召具酒宴より執権一條時宗より一征夷大將軍惟康親王  
に相留す同年大友家より國東郡民者所を賜ふて初て知入すサキ来  
城を草創して大友氏と改め在名富来と云ふ氏とす是富来氏の始祖  
也延元二年丁丑一應安年中萬歳山萬弘寺を建立す其氏の寺とす供養あり  
開山曰郡田原宝燈寺二世豊山正義禪妙開基本尊觀音忠政安置す  
也

豐鐘善鳴錄曰 豊後州萬壽寺豊山禪師諱  
正義本州人見萬壽直翁侃禪師真參寬究  
最上乘東福聖一國師的孫也初視蒙國東



宝陀寺尋歷徒實際萬壽之兩刹玄學蟻得  
益者多自後應富來正壽居士諸創萬歲山  
萬光寺應永元年二月三日示滅塔曰富光  
隆國府報恩田染之鄉安養二寺共係師之  
抑草也

建武三年甲申三月是利尊氏公富來入城案內之先達名封  
到事之文曰

豐後國此家人富來法中忠尚自關東到于鎮西太宰府法  
供仕以此旨可有法控處也此惟律令

建武三年三月日

師奉行所

國東郡

信

法政所

尊氏公送着船之若雅介城門之師之送送也之了且出城  
出船法上法有之

富來本亦感狀致通之內其一二記

豐後國此家人富來法中忠尚自關東到于鎮西太宰府法  
供仕以此旨可有法控處也此惟律令

建武三年五月六日

兼畢

私曰建武三年二月廿九日改元延元也年月日不審

可令早富來至之助法師法名正壽

領地肥後國天草郡四長島津府之輔房中分地頭職事跡  
右為勲功之賞旅行也早守先例一段沙汰之狀依之知依之件

應安三年四月廿三日

武藏守源朝臣判

至姬島與敵船少、押渡、獲、心、許、為、倉、可、兼、玄、林、段、遣

形事案在木付紀伊守申談可々勵忠貞事

十二月廿六日

義堂聖判

富事氏部少輔

於西家執達之長近年軍忠不下及小殊由原法郎親述謀叛  
刻指於雄摩年禮博抽忠不下之末輒逐成敗ハ感状ハ仍為賀  
賞本浦之抄女之事形之可有知行此之體體之

六月八日

親法

在判

富事氏部少輔

裏二大永三年

三月十日吉見之助助取方

曆應四年辛巳四月十七日忠臣由事城之辛去波多子並并

牌名萬弘寺殿正壽安慶大禪定門

萬弘寺  
靈牌馬

萬弘寺殿忠應宗俊大居士

九〇トアリ  
東ニ富寺中興トアリ

忠臣常子信作せし目一觀音と草堂の上ニ安坐し之波多の御魂  
屋ニ家從有趨せりと云々

一幸一道和為石碑建之ニ在位解奉幸安坐ト云々

忠臣此所然也権現と云々信一尚所ハ幼信如紀行幸の事あり  
富事氏代ハ之之没倒後よりいつと云々也云々

宝曆十三年未六月卯日親皇天法代再興之計以年々ハ無事也  
萬弘寺舊記忠茂生之助所立尊氏公於太宰府戦功あり不斜感  
賞依テ直事ハ此ハ幅ハ流賜之由旗地白生紺懸横糸入上之地  
下ニ此ハ幅ハ文字あり蓮一板尊氏公所蓮外ハ左宰府法ハ向  
富事氏之酒宴の席為多ト云々ト云々水晶の玉ハ此  
串輝右為富事寺宝物也云々

阿難迦葉本降定朝の作と申傳

當寺開山豐山禪師より十世の百高孫重福寺未肉食妻帯庄屋  
役と常帯到者より如十世開山より僧侶名清僧より如庄屋役止る  
次慶公府内萬壽寺未由十四世郡公任職より市西成佛庄屋禪  
林寺より如不念より信より退院より次是首座万壽寺より年論あり  
在國美濃へ退くより次楞城和尚の時佛殿再建より次章邦和尚  
堂再建より次單道和尚の如堂庫裏釋迦堂結守社地處重門の  
至志より再建より余法道より買流より當寺中興より次一道和尚  
物より再建新規恒常堂より寺の石恒善結經堂より次現住  
天保年中寺領五石五斗八升餘の如敷田畝於寺中修葺あり

元祖忠政 生助 牌名萬弘寺殿 宗匠橋本七郎右馬

二世忠尚 二郎雅樂介 牌名法梁 旅澤倉病犯 宗匠橋本七郎右馬

三世忠久 二郎蔭人 牌名 法智 後改法光 慈願寺住持社道堂

四世久和三郎蔭人 牌名觀意 宗匠橋本七郎右馬

五世久恒 四郎五郎 牌名廣壽

六世直定 五郎 牌名道威

七世尚信 六郎五郎 牌名道秀

八世信政 牧之丞 牌名常忠 一茶茶殿

九世昌信 右馬介 牌名

十世昌豊 右馬五 牌名

十一世政道 雅樂介 牌名

十二世長道 五郎助 牌名

十三世統元 法光右馬 牌名

十四世元和 作左衛門尉 牌名

十五世 統忠 右马助 牌名

萬弘寺靈牌圖之處前々々分未詳不分明加留身氏之  
一々有之 俗姓年月日未詳也 侍後評故家記

等持院殿贈從一位左大臣妙義大居士神儀 裏二延久三年改改買馬  
智之氏之牌名可成

鑑忠宗珠大禪定門 年号姓名未詳

華敬鎮秀大禪定門 口封

春光以新禪定門

活宗妙禪定門

各靈年号日姓名未詳

天正六年戊寅年十一月十二日於日州耳川戰死

清凉院殿前伊州庭林紹桂居士神儀 裏二富來伊賀守定直

春嶽紹榮禪定門神儀

裏二富來勘左馬尉實信天正六年戊寅年十一月十日定文前伊州共討死

曾富本禪宗仙松山萬弘寺者其先藤原姓永井末裔富來家靈

屋寺也因継斯由縁為祖代靈位崇敬之茶湯料 誌焉

富來實直九世富來勘左馬尉實信

文祿元年大友豊後守義統大岡胡解征伐に依て催位陣因て

一族雅樂助佐左馬尉平作右馬助権左二回随順出陣文祿二年大友

義統没倒後宰こと成諸明より赴く文祿三年甲午豊後大岡豊後

國檢地後七人配當富身城に實如取守家純二方石田領大領 三川後  
此二垣見和永古あり垣見氏之  
相違ふ所等て實と實と其と名字あり

家純の元祖 未見聞  
是改關 大岡子原一登庸 相興

國征伐の時も軍監七人並の四より渡海 此謂七人並大岡  
直子毛村氏於少輔言以實如取守家純

内承助直陳年中伊賀守重信  
早川主馬首長海 石田三成と心を合福系然也早川回復して諸大名の

働と申通せし此故に諸大名是と語り慶長四年伏見の城に神君

両前より一々戦災奸謀頭を領知召上りて改易上成

太閤政所 紹  
寛永元年子九月六日逝  
高屋寺殿前位  
湖日大師

傳曰去慶長三年戊戌八月廿六日太閤秀吉公伏見城薨去

法謚國泰祐松院殿從一位前関白太政大臣雲山俊龍尊儀

勅贈正一位豊臣大明神 洛東山鎮座

右大臣秀頼公大坂在城大老、神君伏見に在城加賀大納言菅原  
利家卿、逝去會津中納言上杉景勝卿は病氣とて在國毛利中  
納言大江輝元卿、大坂西丸在住也浮田中納言豊臣秀家卿、大坂在  
城中老の人々、中村式部少輔一氏生駒雅出、親正堀尾常刀先生  
吉晴、淺野彈正少弼長政也、五奉行の人々、大坂形部少輔吉隆  
長連大藏右輔正家、増田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成等、所  
于時神君、大老中老五奉行中隔意の事有、処梶尾吉晴、前田  
徳善院玄以、兩人を、取扱和睡表向、治、皆内心は解、以斯の  
如福、山左馬、主正、則池田三左馬、輝、以、如、主計、改、津、正、細、川、越、中

守忠、具、淺、野、左、馬、主、幸、長、黒、田、甲、斐、守、長、以、如、藤、左、馬、助、喜  
明、右、七、人、相、難、立、傳、の、時、軍、功、あ、ま、石、田、三、成、の、討、ひ、も、恩、賞、の、沙  
汰、も、も、一、さ、り、三、成、と、治、く、恨、ま、る、知、れ、左、七、人、中、今、石、田、の、故  
よ、押、寄、り、討、果、す、る、種、定、あり、も、風、前、御、君、竊、聞、召、さ、た、あ  
ま、は、又、強、動、よ、及、ぬ、事、一、と、石、田、の、方、へ、使者、を、遣、一、斯、の、取、沙、汰  
有、一、刻、も、も、一、中、國、へ、引、取、寄、り、と、告、げ、れ、三、成、大、老、お、さ、さ、り、也  
國、江、州、佐、和、山、へ、引、籠、慶、長、五、年、庚、子、會、津、上、杉、景、勝、遠、達  
の、間、あり、因、り、御、君、系、傳、珠、成、と、て、二、月、餘、関、東、へ、は、進、發、給、  
石、田、三、成、大、坂、へ、出、府、毛利、輝、元、浮、田、秀、家、亦、申、令、神、君、と、攻、討  
ん、と、諸、軍、亦、催、先、秀、頼、公、の、上、意、と、て、安、國、寺、惠、院、和、若、因、州  
島、取、城、と、知、れ、廻、文、を、所、持、一、と、四、國、中、國、九、州、巡、行、諸、大、將、を、亦、催  
大、友、義、統、一、別、使、お、副、少、將、と、下、也、以下、

高三成の沙汰しそ然五直陳貞宗純は本領を豊濃州大垣城  
に遷すか関ヶ原は陣の時高橋左衛門將監元種討て横死す富事城  
には兄貞助を弟息九郎堀家長井伊理左馬頭兼井九左馬頭堀地妻月  
成平右馬頭代官ありし日あつた百の法下ア同年九月廿三日甲辰日ぬぬ惣勢を  
平ひて押寄ありし陣に黒田國重毛利左衛門也徳城東  
北海濱高石垣の上は堀成行は平地ありて堀深く土居ありて築  
上り上り堀と惣二層は隅矢名ありて和門櫓ありて右左取り  
大の門前より二層土橋ありぬ水城分坤の方より陣を居先を  
任寄を附攻む城内三井伊理左馬頭一説高純ノ弟也兼井九左馬頭小防殿  
曰はふおつ九左馬頭と大将しそ完亮の勇士三百人城戸を開先  
陣軍備兵庫の陣にお討寄り家防戦すししともふ意のまは  
敵多討てし願ふに利を構ふ勢しし知し城兵の後口より解

んと押廻り兼井左平より知しそ兵を戦えぬ城口より互に矢合  
しと関ヶ原に於ては砲軍初たりし城兵櫓の上より大矢を射懸り仕寄  
の竹束を焼きたる者ありしと又も法炮を放りぬも皆くあししラノ語ガぬ  
水田代彦助と呼てそ方急仕寄り近付大矢を射る敵を討るを  
一と下知しそ彦助承て先より進み一放おはれぬあししし  
実に見廻りのお越成と考へそ及は矢切をお切すも程も見廻放ちし  
知り敵の肩間より櫓下より落きたるは力をい先子法炮を頻  
しお射る物に銀は火矢を射懸りぬ故外廓の堀をお破城兵堀  
裏へ忍びし三九引退く惣者三の丸堀裏を固めありぬの櫓  
に法炮を雨雹のわしくお出す時ぬぬ水の家人吉田左馬頭後号之  
の側よりしそ謀る白城兵今もお出るをねる境と口ありしそ  
ぬぬ水聞入し又日城兵突出ぬぬは思危く是れ物具品せし有ぬぬ

如水笑曰是程の少城を攻る運具乏と有る勢を必し死す  
也といふ又陣へ越矢の事ん計ありと楯を擡りぬら水曰陣  
は陣牌を附きは楯にふ大事やい復し大膽を其の強將ありたり  
又軍の固まりは固く伯耆軍人の少城の下の海辺に陣を居る  
しりて舟楫を以て意をなすは舟勢ありたりも亦た危くもの  
を思ひ哀れ一攻せんとて也と或は潜り城の城壁に忍び寄  
り俄に攻むお其を攻口防く登る人ありたり久し難く外廓の城  
一重破るに大なる城中のものも是をみるに丸の櫓より砲を  
遠く放ち魚回書伯耆軍は深淵と城中より噴き突く楯に  
あふふ勢を皆石楯よりしく捲落さるに陣へ引返し遠攻を以  
てしりて新に城中の者も寡合評議しははどの楯より程  
と後詰は形も又何に限らずは大物に圍を徒は為城せんを待

んより和を乞城を開んとすもあしめ陣は思ひしに其精  
力未だ先にお出せ難く是速く思ひ楯に討死せんといふも有異議區  
とて是を去せしむるは又富永の城の海より伊勢艦は海賊の  
船軍に別とて者もいと水抱に立りたり其時數千艘の船を押し  
海上の通船を絶せしむるは其言を信ずる者大坂を急  
に出陣せしむるは一圍防固上の関を必死と云ふも海海の  
船を以ては其より豊後津佐田関を志しむるは九日其言を信ずる  
は其言を信ずるは一沖と言ふも亦た其言を信ずるは其言を信ずる  
と燒て去るは一舟の間は互に信れず物名のおを守て亦た  
は其言を信ずるは其言を信ずるは其言を信ずるは其言を信ずる  
成りされは婦人の言も其言を信ずるは其言を信ずるは其言を信ずる  
り其言を信ずるは其言を信ずるは其言を信ずるは其言を信ずる

方の船も知らぬ事の地を囲むる番船の舟中と類船と心得  
て急ぎたる運の極むるのちりきおのりも陸に海を見渡  
せば沖波系船と云ひしは船は敵地の磯辺近くを急ぎて向來の  
前を控へ通るる薩摩船と云ひしは急ぎて急ぎ掛と云ふ  
取柄もつれ走りたる彼らも番船のものも向來の磯より  
一里程沖へ漕出しく御方と云ふ事の地へ通る船と走り急ぐ  
と云ふりたる薩摩船の俄に掛と云ふ事一沖の方へ出ると云ふ程  
船船と云ふは船の儀と云ふ事と云ふ程と云ふ程と云ふ程  
四艘の船も我先と漕出しく急ぎて陸地を打掛あり向來  
の船も番船と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
船と打掛あり薩摩船の逃はた船也云ふ事と云ふ事と云ふ事  
附き薩摩船とは逃れぬ所と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

別も無き量と潮と浪一船の垣を立無矢面と云ふ事と云ふ事  
番船の者も混々押きて我を番と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
りる薩摩船の者も陸地陸長りも打掛突掛ひ合を限りし  
防ぎられは事の掛負は見しりたる番船の者も急ぎて向來へ出  
船の若し火と掛て薩摩船と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
舟清は婦人の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
とのれく船形の上より火燃出たり事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
火は投ぬく攻なりたる薩摩船も事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
やも事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
船は切船と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
は船中難人事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
のみくは成りたる船形の由は優り氣をさし上層と云ふ事



達勢多成りし種火は是より燃掛し程なく身も燃焦れし程  
其子千尋の底より沈みしを以て分<sup>ヤリヤク</sup>明とせん種く勇気は海賊の族  
各段の袖を濡ししを以て九月廿七日の夜一天軍始て申の中  
刻るハ仇の関の前より漸く事終りし

和曰女郎并其母は士年守江の  
漢大慈山慈の関に葬りしと云傳り  
場とて今も古墳有るを  
慈山寺ありしと云ふ

仍新と古無討に到婦人守備と見えありし固捨もなく討  
之事言終りし其の者を也一と殊すなりと有るを老臣曰  
浣術加をを敵見すなり其の沖者船の者も死節  
と押あそを使を揃えし陣へ引きたるは濃州より和泉守家純  
の初等子江良新を馬に引きて其の如也如水頓て其馬中を  
見ると和泉守濃州大垣より富基とせし死れ也其文曰我南  
の恩を報せんといふ大垣の城は一命を捨畢其上に其子の城無儀

敵方より海より来る者也と其書より其如水是を見し其書中と  
感一急き此使と城中より一別の兵城内の者を人にも言をな  
し其すまじ城を流すしと一合見城中へ放りし後責は成退き相  
待せし陣中より理者も九を馬におれし以上六城を以て退散すし  
使者と如水の陣へ遣りし其時毛利方と敵曰お討の時味方多討犯  
られし其人も強は討果すなりしとこれ如水笑て自敵ハ味方と苦  
し味方は敵を極は其軍の定法也敵味方死傷功と云ふ事肝  
要也といふ我もは任すなりしと一圍を解城兵を招きし城外より出れ上  
京新左衛門城城ありし其母孫井九を馬寺田侍右馬目成忠左馬  
寛治を以て南本合す其母田助を以て南河内守其母柳田九を馬  
お名ありし書を以て一食禄を無くしし其母幸平方守如水より其  
す者あり方一敵敵し其方知し成りし

傳曰寛利有園門八年を經て筑前守の柏原郡青柳村を治り  
 其を以て長政懇情を起りて其子飯尾甚太郎濃州池尻の  
 合戦に身以て奮勵ありて敵を討つて感心し長政に中一領地  
 三千石賜りて此地を連綿すし云々  
 以後慶長六年辛丑木下右馬守幸延俊君日出し入部の境  
 細川越中守忠興君味智と争ひて城繩張り築き此の時  
 城方の扉を以て出の場と違へ東門の扉とすし云々

高田城 國東郡

大友家從高田伊賀守源正孝居城

元祖鎮守府將軍氏藏守源滿政朝臣九代の後胤高田掃部  
 頭源重貞建久七年丙辰大友能直府内入部之長陪從高  
 名字の地成とて高田の驛を賜ひ食邑とす世々相續伊賀守  
 正孝と稱七代居城

●重定 掃部助 義重 次郎掃部助 定兼 修理亮

信覺 左馬助 定富 太郎掃部助 定玄 大友刑部

定祐 掃部助美保 為雄 掃部助 定儀 美佐子

定標 民部太輔

基成 掃部助

基重 美作守

隆定 美作守

義治 美作守

鑑将 掃部助

鎮孝 美作守

正孝 伊賀守

此苗裔曰新濱町ニ蟄居洞氏ニ改出地奉行官部氏代官田中善在門改範ヨリ當所  
由諸依有之ヨリ出大庄屋役ト作付依之高田ノ本姓ニ改セ、連綿當時高田源助早先祖也

文祿元年大友家ノ属一朝鮮ニ渡海曰二年五月新義院改易倭  
一河浪ノ上成高田城空城ト成

文祿三年甲午太閤豊後國ニ上之紀當所城ハ林中源助隆重 後伊  
直守  
萬五千石ヲ領入於隆重ハ太閤秀吉ノ属一登庸ノ々豊后ノ姓ヲ

賜小慶長三年戊戌城再建修復ト居之東西三町五十五間ト々  
南北三町檢間也 文化七年側量  
方改之 曰五年庚子九月関原陣の時隆重

大神君ノ随從息米女正重具為者有之、高田方々隆孝馬

入道如水の使者其々曰関東の地方に進む重具曰心とつても出勢進  
々々及ぬ重具、使者を走せ之曰出勢程遠くおる、高田城致坊ト云

一宗老云被三々美裸馬ト云黒田の信々其々曰林中家旗の致迫以子  
田あつて汝々未成就也を祈進々々及ぬ金達心とあつて、此時りと極き

出勢馬向の陣ト加ぬ、安政石垣原ト出陣父子共々軍功も信々曰  
年十日 祀君より二万五千石を賜ひ府内城有領之於因之空城ト成 此空城ハ  
美作ニハ

林中源助重信叙爵 島長胤曰我先祖ト林中伊三ト云送リ  
伊三ト云 ○ 此有まは林中伊三ト隆重ト有之

林中家の古ト云尋子林中守之剛尉重治ハ秀吉云の軍師ト云ト云  
重治の父老を以て其の時美治の國守護高岳山嶺入道道三ト云  
之和郡磐石の地ト有之重治幼年ト云父を以て其の地ト有之  
十九年ト云主の右兵衛督龍馬ト云恨々事あつて龍馬ト云其の織田家

属して功名なきありし者、俗之秀吉云重治を養育用ひあふ天正七年

己卯六月播州平山の陣中、卒し（詳前譜）日向吉正人の子に、八重治り、南福成略

と申せり、ありて、人三木の陣にあり、日書、嗚呼、とて、僧の具敷多、おとて、御少の初也、主謀、攻落、たる、  
後は、必世とのり、れんと、思ひ、とて、一と、云、甲、中、主、秀、吉、秀、吉、秀、吉、ひ、の、か、り、と、他、の、我、才、の、重、治、は、及、ぬ、事、と  
知、り、き、と、申、し、い、み、思、ひ、ぬ、と、い、ふ、り、か、は、思、ひ、三、一、成、一、い、ふ、り、の、陶、米、公、子、房、う、た、く、い、ぬ、  
お、か、ら、ぬ、と、思、ひ、と、申、す、に、一、の、あ、は、し、く、あ、り、と、申、す、事、情、を、申、す、や、又、幸、ひ、あ、り、と、い、ふ、り、  
は、さ、ふ、な、れ、  
行年三十歳○重治り子丹後守重門は童名源助七郎と

重治は後秀吉云天下統一統の後十六歳とて、叙爵母は中よ任也（善治）

慶長五年庚子の秋、関原の陣中、は、神君、信、公、西、撰、津、守、行、長、と

相川の地下、人生、捕、く、重、門、り、許、り、引、奉、る、と、神、君、主、奉、る、大、坂、法、陣、は、

酒、井、雅、樂、所、志、世、君、の、よ、く、帝、を、功、あり、寛、永、八、年、辛、未、十、月、九、日、卒

五十九歳○慶子伊豆守重信は有六方の母は重門の事は又曰

書に重門は豊後守の旨の地賜ふと世に傳ふ、元和九年癸亥

越前一伯山豊後守配流あり、府内の地領せ、中、伊、米、女、正、重、次、治、り、今

成て千石の増を賜ふ、竹中り領をせ、二万石とし、重門を勅たり

重門は、り、と、い、ふ、事、也、（地、を、後、よ、曰、伊、豆、守、重、利、府、内、地、と、領、一、米、女、正、  
重、次、治、り、と、い、ふ、事、也、） ○寛永九年、  
米女正重次、

利の誤、米重、利、か、碑、文、曰、三、男、一、女、あり、長、子、は、左、兵、衛、尉、重、常、二、男、

米女正重次、三男伊豆守重利、早世とて、伊豆守重利は、米女正重

次り、方、ち、と、い、ふ、の、宗、督、兄、の、遺、志、を、承、け、あ、り、と、申、す、事、情、を、申、す、  
又、丹、後、守、重、門、の、旨

内、城、お、領、す、は、長、男、左、兵、衛、尉、重、常、遺、志、を、承、け、二、万、石、を、重、次、宗、督

の、故、者、の、事、り、疑、と、い、ふ、事、情、を、申、す、  
後の評を侍り

其後三年九年、經、て、寛、永、十、六、年、己、卯、豊、前、於、玉、城、に、見、松、平、丹、後

守、重、直、云、高、田、の、古、城、を、再、興、の、事、に、是、を、移、り、あ、り、米、地、は、三

万七千石（千、石、の、内、は、領、内、也、其、地、は、水、を、目、の、故、に、名、を、と、り、と、い、ふ、事、情、を、申、す、  
城、は、再、興、

成就あり、  
寛、永、十、九、年、壬、午、十、月、廿、八、日、東、氏、淺、草、島、越、の、郎、と

兼、り、あ、り、寛、永、永、九、年、癸、未、二、月、は、嫡、男、東、市、正、直、好、公、相、續、り、あ、り

正保二乙酉同國本付の城を領領部以候に料成りて直好  
 公領りぬし本付城より可なりぬる事存案城元禄十一年戊寅  
 廢城と云く 吉岡旧家の記に廢城事あり干時  
 文化十三年丙子と云る十八年戊戌と云 當今肥前島原城  
 とは松平と殿頭忠候君領七万石と内二万八千石也城内寺方四  
 千石除豊後二組 吉岡  
 山形組 伊達陸奥萬三千石除豊前三組 山形組  
 長洲組

日出城 速見郡 弓場城

大友家從太神掃部助常陸助源眞正入道宗邦 天正十一年癸未の弟  
 七月廿三日卒 大神孫士郎鎮氏食邑在所より鎮氏の息地伊守鎮房より太  
 神兵部太輔鎮勝は深江の城に居住

太神の祖は大友三世兵庫頭頼泰舎弟次治部左衛門重秀の  
 孫太神治忠後從前守朝直豊後速見郡一戸地と地名を以て  
 氏掃部助治忠の先從也又曰孫士郎鎮氏大友宗麟の舎弟依  
 て食邑為在所云々

天正四年丙戌冬薩州軍將新納武藏守忠元速見郡に亂るの  
 時防戦堅固此城三方岩石高く徑身一而小名は速見深江の淺廻り  
 圍む北一方山嶺と云く処とは岩石を穿て城と一石を穿て城と云り  
 新納の勢城の分りて見令輒く是城ありは退屈と云

文祿二年大友家没倒後空城と成慶長元年丙申太閤秀吉

より毛利和泉守重政初名無橋後豐後守  
毛利伊勢守重政三万五千石お領す部大友世譜曰文  
祿三年甲午二

月吉元利無橋を敗建見是 其七年乙亥細川越中守忠興十國東建見

二郡より一万石加増地より依之重政大坂引取慶長五年庚子秋

大坂より石田三成より一宗討絶より同六年辛丑本下南門

を更豊臣延俊君三万石お領す部

本下家祖は肥後守豊臣家定尾張國位人杉原常陸介之通道

杉原常陸介助左内通松大居士杉原常陸介助左内通松

杉原常陸介助左内通松大居士杉原常陸介助左内通松

杉原常陸介助左内通松大居士杉原常陸介助左内通松

杉原常陸介助左内通松大居士杉原常陸介助左内通松

文祿九年子九月廿年  
龍勝寺殿貞菴通松  
大居士  
杉原常陸介助左内通松  
慶長三年戊申十月廿日卒  
助左門令室朝白  
慶長三年甲申八月廿六日卒  
常光院殿茂叔淨栄大居士  
木下肥後守家定重直  
寛永三年辰九月廿日卒  
雲院殿殿齡岳永壽大居士  
家定居令室  
慶長六年卯十月廿日卒  
瑞雲院殿秀殿日詮大居士  
黄門金吉秀秋居

濃守信定君早世五男金吾中納言秀秋卿之男出雲守基君嫡子

勝俊君の秀吉より若狭國より一万石を賜ひ慶長五庚子秋關原

陣の時伏見の城跡より一徳君此は家人を攻の時勝俊君秀

頼公の命より伏見の留守君より如丸より有るより勝俊君思より

徳君仇を結ん事謂はれし都より東山の辺りより極長より天裁

翁よりより生涯を終りし人歌道より名高く皆人の知る如より長

嘯子よりより依之三男利房君家督君也信長よりより文昭あり傳中  
三男

延俊君父家定君大坂守君後遂之常より大坂の城より有知父の代友

より眼珠の城より居任関より京陣の存延俊君より於君也 徳君

より同十月細川忠興君共より丹波國より豊前より豊前の細川忠興

君の城を攻り大將小堀秀定建敵陣より福智山の城攻めより其七年

辛丑五千石は加増を賜ひ於今より三万石豊後建見日歳お領し其君

延俊君入部の後細川越中守忠貞君妹實子依て再建の繩張築  
之則之の此時忠貞君の城大子の藤と高家城門の藤とす今程存  
す實承十九年壬午四月二男縫殿介延由君五子石田郡立石村分知  
辰任實承三丙戌六月廿九日辰任初名内近田時延也助是名家督以存系後幸得 日号  
當時本下流の助兼俊君之從也其代まをる

七年去法名瑞巖院殿心甫宗得大居士全室細川越中守忠貞君妹實  
七九年甲辰十二月十四日卒法名松屋寺殿即養貞之大姉

二世俊治君伊賀守家督二万五千石全月縫殿介延由君五千石分知故 明暦二年丙申三月

三月日國府内城三日根知之孫孫正吉明卒年嗣子新純是南城  
と成 者首公御命とあり俊治君是日國本付城と松平東本庄  
直好君百有内城立藩の作とあり同日九月九日城更ぬ九直好  
君元俊法君立藩同日高直君元俊君は日國本付城と松平東本庄  
是日重俊法君立藩同日高直君元俊君は日國本付城と松平東本庄

杵城之稻葉能久守越智信通君上府内城立代に任有り後守備

付西尾孫孫衛天方とありは孫孫法君直好君幼城令に注松平と

孫孫源忠房君女實承十四日九月十日卒法名桂林院殿月輪貞憲大

姉再室西尾丹後守源忠承君女初孫孫助源重昌君とあり重昌

君早世後俊法君娶りりり實承十三年冬七月七日卒法名德昌

院周春譽華盛文姉俊法君實承文元万法四辛丑四月三日卒法名天澤院

殿徳岩宗高大居士城之譜三州二月丁未卒去行年四十八才

三世俊長公右内門左大臣院家督令室朽本伊豫守孫植昌君妹室

承元元承七甲申二月廿七日卒法名長陽院殿轉譽松園入林大姉俊長君

享保元正徳三丙申六月廿七日卒法名桂峯院殿英岳宗哲大居士 將徳宗画王

中法入徳殿一福一殿主

四世俊量之君或経少輔伊賀守家督令室加藤越守明英君女實承六

年乙丑十一日卒法名知覺院殿性空峯日真第大姉俊量君享  
保正己酉十月十三日卒法名德音院殿俊量廣哲大居士

五世俊在君收子五家督享保十六年庚十一月九日早世

法名遠讓院殿温厚操候大居士

五世長保君和泉子實俊長君三男家督元文三戊午八月九日卒法名

龍溪院殿圓應淨覺大居士

五世長監天岩三郎實俊量君二男家督寬保元年辛酉十二月十四日

卒法名儀善院殿鐵山梁船大居士

八世俊能君式部少輔實俊量君三男家督實延元延字五成辰七月廿四日八月晦

日卒法名心亮院殿雨清淨安大居士

九世俊恭君内務助大和守實俊量君四男家督令室工改丹後守朝

穂君女安永十年丑二月廿六日卒法名鏡貞院殿智圓妙光大姉俊量君

明和五戊子七月廿九日卒法名靈祥院殿俊岸恭英大居士

十世俊胤君左衛門允實戶田越前守源忠余君五男家督令室工下

地後守利忠君女明和九年八月廿二日卒法名瑞仙院殿日定妙賢

姉俊胤君安永五丙申五月廿日卒法名赫院殿德邦嚴馨大居士

十一世俊樹君主針頭安永五年丙申七月家督令室太田備中守源資

愛君女文化四丁申十月十日卒法名慧鏡院殿圓日淨光大姉俊樹君文政

五年七月三日卒法名謙德院殿泰容儀哲大居士

十二世俊良君伏波守家督令室有馬玄蕃院源頼貴君女文政

三年辰十一月七日卒法名禎彰院殿蘭室妙薰大姉俊良君文化

二年亥十月廿日卒法名德光院殿前伏州刺史秀山源英大居士

十三世俊毅君大和守實舍弟家督令室酒井美雅守源忠進君女



府内城 大分郡 号荷揚城

大友家代々居城也。元禄三年甲午豊後中檢地。後同年十月豊  
太閤秀吉。早川主馬首長梅武徳編年。武徳安民記。同前。程波軍記。二。重  
行あり。又朝鮮征伐。三。長考と有。

大分郡の内を萬三千石を賜イモ。方  
七千石外に公料出納地四万七千石。於今

二万石を之に部豊後國。開。方。二。知。方。二。千。石。大。分。郡。を。領。す。り。同。部。家。知。子。居。位。  
外。四。万。七。千。石。を。料。納。す。り。於。今。二。万。七。千。石。と。あり。

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

豊後國を以て之に配。秀吉。有。内。城。早川。主。首。長。梅。を。方。七。千。石。を。領。  
取。於。地。以。前。と。通。北。城。天。正。の。兵。方。を。罹。り。慶。應。の。也。早川。修。補。  
或。は。再。送。せ。し。む。同。年。閏。七。月。十。日。濠。洲。水。人。民。七。百。八。十。牛。馬。船。を。如。  
此。時。瓜。生。島。悉。く。沈。没。海。底。と。成。瓜。生。島。は。沖。の。濱。浦。を。向。地。の

内城返上豊後國。開。方。二。知。方。二。千。石。大。分。郡。を。領。す。り。同。部。家。知。子。居。位。  
外。四。万。七。千。石。を。料。納。す。り。於。今。二。万。七。千。石。と。あり。

武家盛衰記曰。早川主馬首長梅。豊後の内を領。知。方。七。千。石。を。大。目。付。に。

は。け。朝鮮。征。伐。渡。海。慶。長。四。年。以。目。代。中。伊。豆。守。毛。利。伊。勢。守。西。と。新。論。

の。事。首。長。梅。の。城。を。對。望。せ。し。り。早川。主。馬。首。長。梅。を。知。り。知。り。知。り。

放。逐。放。せ。し。り。因。て。本。國。奥。州。に。赴。き。伊。豆。守。の。合。力。以。て。居。又。三。成。の。

也。一。思。道。の。事。有。り。れ。一。生。日。影。の。者。と。成。て。死。去。せ。り。子。孫。は。今。仙。居。景。

中。に。有。り。少。緑。と。云。て。は。友。す。り。云。

日年福原古馬助直方為當城所領之部 此地白旗之方石等中加増 大分於玖珠縣建

見於三郡の内領之 或曰古馬助諸軍記云存て考ふに此城といふ身の人既相輝陣の兵軍臣の

人也見然に早川太田林中先利ハ七人の内十二万石の事云當如白旗城の時ハ三

豊前聞書云苗子福原古馬助直方慶長二年丁酉二月関白豊後

大分郡遠見玖珠縣の内於此方石を賜ひ有為の城を築く 前知六

命して曰大友城ハ秋澄よりて要害あり此城は地裏より掘り大破す城地を

改め築下と直高長生知新助及ひ大軍士を率て三月三日有内

沖の浪より新助と吾子有内山坂豊城を築り城地を築く六百有

余り山河より平地あり郡々の民衆穀と有播一也或ハ自他の高

船よりと吾事と御所依之地を築築と云平度より九青龍 龍首

虎鼻 大鼻 前朱雀 在平 後玄武 ハ海 四神相應の地あり古より高城と城地

と云 瑞光寺の敷地を切り城地 ハ 傍を築く 府城と云 二匠

命一城の南西四方を七星三三三と割し三三三と當て同為

寺あり生島新助云城中は精舎を築く例と聞け他は移ん城を割

しと曰是大友氏泰系創の旧寺也又宝殿ハ大友政親建立也不殿より

とも工奇巧と云一海西よりあり他は移すとも思と民人より命一郡

中の方石を切有中は集之或精舎と土佐の山中より求巨多の郡と

伴り生石沖の濱壇 ナカ 九井ハ船利ハ便り有の民より命一高城ハ高

大石と積て城地と云或ハ此國高船有ゆり事毎押し命一船

と一々大石を運しむ是皆石田ハ武成と云て此事と勅む城地毎

右場より出て唐人の甲乙と云みり日三年戊戌七月十日生石新助命

奉一由原山ハ信守師ハ謂一由原寺院神祇若耕化す由烟

并神祇の位后寺院境四ノ貢云々五十四斛五斗六升九合云々

史詳す則新助日守師と外ハ守師ハ賜一由原神領は重

可命と云し曰古者大雨是日鶴見獄東北の麓深淵大は倍  
又山頭崩き落し深淵を埋る事すお淵水溢り出大河多流  
海々々時々逢見邪相見え久光村流洋一死する者半余之也曰古  
城の土を築き築き時本墨東北の隅沼池より水湧出功を成  
難し生石村の名を二宮氏智略あり多く桶を集め流を付  
籠り約瓶を中一社人と云る者ある向に沼水と汲む事  
成難しと汲むは時石河に管一巨石を以て石壁と築き連  
よそ地を築き湧水有しとも石垣成故土基を成物す庶民と云  
堀と云ふと土と云ふ地とす或は本城の石壁と築き堀の土を  
とれしと有る及び自國他所の船人土河民人主功を成し金銀  
事穀と集めて學す一人日限も也古四年己亥元旦法人  
有地あり貫を述る曰年月新城三階を構及び社屋の大

度ぬる古馬助方より森以地名は確一若原城と名付し城を  
城ハ地名ふま成りて若原城と名付信を信と云ふは旧城と  
昔一新城に入曰年月大津若馬助と責すの功なりて  
前地を信一控領方石を領一豊有城と成し浦を築くはらす  
一々旧城を以て新城と築く是皆石田の意と恐すす也と云  
直高を以て領地と減一旧領六万石を以て旧地に移らしむ石田三  
成帳と申若し金事甚しと云ふ  
のりのと拾ひてとある記も旧領  
之方不何國とてなりぬと云  
直高権威言く上代より不易の有る城を破壊して是和の海濱  
より移し新規に城廓を築く  
此城福島の城四ツの境迄  
この城を築く 府内廓は神  
社佛閣并西尾の地は貢物を納むる役と云ふ也所は庄屋を以て貢  
物役と可らしむ廓内の政務郷中を掌りて是直高より始り城を替

れも連絡し今も伊予守備早川及石田中居臣曰七年壬辰成  
新領は十二年壬子成領也

美吉四年己亥八月右馬助直高有田改易

氏徳安民起の八朝野在陣軍  
監依怙の所ある改易とあり  
増え石田知方石賜又増常より有権威ふ仁し所考者とも減知と豊前守  
より或曰き他より大坂引をくんと一説大坂の城といふ

美吉五年庚子壬子東陣の首直高石田より一美吉大垣の城

大守多石由丸主將福原右馬助直高石田勢二百子終人と

あり初 大和秀内村達三成改易の伊勢守國へ配流せらる

一と云船をせせ送り一石子船中より殺害せらるる美吉長

四年己亥福原改易早川より首長敏再石田賜

豊前旧  
早川 慶長五年庚子関ヶ原陣の時三成

氏徳安民起の大坂の城に入安流川橋の  
長海の城代早川内右左衛門右衛門水戸依  
て人質とす一開城とす一也 一石田をたてて美吉の城也

早川氏は石田家滅亡とす 毛利を石田城をたて

豊前間書曰慶長四年己亥五月 大神君豊後大分郡の内

領地二万石と早川より首長授け有田揚城より石田

再石田府内より新領地を領地の政事と行し同年の秋吉

の城より細川越中守忠興より美吉長尾杉井依源より吉

甲斐守長尾城代より慶長五年庚子七月石田三成石田津守

行長も送音と書し檄を諸州より大兵を催す時早川より

美吉首領より福一我々神君の命より再石田府の城より成

知有大同の恩尤深く三成と親睦深し依之西方より属せんと大

坂より美吉勢より石田より属す云々

曰年神君天下統一統の後諸方各封國割賦あり有田城より同國

高田城より中伊より書信 知源ゆ又貞吉書  
全信とあり 二万五千石賜之

大坂の家老より彼飛人より官一軍糧美と書し曰六年辛丑

十日高田城を占むるは千石の時府内城の地を方石於三万  
五千石 氏徳滿年二萬六千石田領高田城を方石五千石

豊前國書房二十六年回年 方印書出件重隆の軍功を感

一 高知石 高知石 信一 大分郡の内を或方石を賜り府内高揚城  
附與す又高知の地を方五千石を於合せて二万五千石也重隆城を  
廻り云前高知府内高揚城を掃一 大堰と城如三方は堀り  
築地を掃一 三階のま樓と築き功中より一 田地を掃一 我々  
能くすしつとも大功を就すんはありしと城廓を改せん事を聞  
請ふ大御君重隆の命一 敏と築き城を固くすん事を  
許さる依て民人より命一 清山通海の大石と高知府内國の如  
許頭清山と高知府内高揚城を掃一 石垣と築き又今高  
き一 材木を求る船を積すり 高知の地を築き巧匠數人

とて一 築業と成り又大坂伏見の瓦海を占め高知の瓦を造り  
一 氏慶長七年壬寅三月其功成就す又高知と城墨の東西の三  
日一 建回年の秋軍松の控留市橋氏を以て南往て日城の東の隅  
沼地あり我々賜ふハ沼地を埋て石壁と築き高知を造らん高知  
拒る利ありと云免件あり市橋氏高知下の船を二百隻と一 高知  
有負一 沼と埋免巨石を以て石垣 高知の城如口 城四方を築き岩田屋  
有る力を勤て高知高知月より一 成大家を以て市橋氏を以て  
有る又議曰府内の民屋を廓如掃一 大堰と府内の如側一 堰を  
堀りて築地を掃一 堀を以て高知の地は堀り水と泥城郭の  
築成しん一 長居三上氏と江府より一 天下の大老を以て府内の  
民屋を堀り掃せんを請ふ能あり重隆高知府内高知町長  
と一 城墨外境高知府内高知町長と一 甲余の町と別有

曰新地を以持のうは新野の僧吉見と撰ひて其宮の宇社より生石  
小島より返田と結し是所人として四町の名を呼ばし者をも賜ふ  
多に於て府内人民近村隣里親厚助成と徳力を合新地と平  
より四舎と破り運送の店宅と構ひ精舎を向し長は数日を以て  
民を悉く新府に移す意の固く任呼んて荷揚城と府内城といふ  
城を勤松と名出地の上植しむ其長九年甲辰春紀伊國に如歸  
る計願法正重隆築城の功と賞しそ有城より重隆大に松  
谷倉為美と名す法正と昔を感すも如く法正向して向松野  
の若河人より築く重隆曰富長市場氏築く所也法正嘗て市  
城より利有と云三百余歩中神社境内より蓬萊山有是城の爲  
は甚ふ可也連す可崩と云數日逗留し是所より重隆法正の言  
より徳の蓬萊山を崩んとす此山は六府内と賀しそ上古より春日

宮の境より築く圍を蓬萊を南より後山を崩んとす先蓬萊山  
を左側より築く是表のの蓬萊山を崩しむ其長十年乙巳の秋  
城を築用の民と書し曰我豊府より一より法正の大功は當年外  
甚感賞す城より又大堀と新府の境より堀んとす是を成時は我心  
印しむ是より堀とかり築地と構ひ松を築地を植しむ今春の功敷  
年と煙を成し重隆大に松の末教と書して民と賞美す曰十二年  
丁未九月重隆は府より到り大津君と相賜し一由松揚西洋より  
舟波より舟より運す春日宮と新野に種をく保國より依之松方の  
松と春日宮の境内より植種目を誨り同年の冬府より忠徳の府内  
より入と如く近敷人として松川口を和口 松屋町口  
築し士卒六人とすまき立民衆を守りし其長十三年戊申春  
重隆は家より後し新府西北の隅江河のほと船の利便好とす

江河と堀自他の商舶を往來せしめ其穀米倉府より先満一  
有人居ありて商買を成しむ其地好月と號す則堀川と名づく江  
河の入口と堀淺と名づく京泊と名づくエヒモセスト  
必死ニ準ス又賊船の堀川を  
懼し且船子暗殺京泊を知らせんと號し堀川と京泊との中馬樓を  
建し辛酉と壬子船の出入を單一在堀と名づけ一京泊と京泊を  
知ししむ辛酉十三年戊申内推地有華行得島法を樹庄田と名づく  
少羽成改役人辛酉九年堀川慶長十六年辛酉春重隆思ひらく  
我々の地を堀川と號し南郊の道區田有る跡を直に新府と號せ  
はるありて民をて有の南山と號し谷と埋え道區を成しむ  
慶長十六年冬十二月重隆府内領田を放ちて一倭民の怒甚と  
聞ひ頃年領田の民數年の事より宗業とあり時より  
困乏し老幼婦子を携へて回より行く者あり重隆ちよ驚きて天

地の時利も人の移りありすといふ城郭堅くふる民服せすんは何れ  
乎と号し仁政を以て困乏を救ひ土貢及び諸役運上並に實者  
より領田の名を治事と號し逃散の民を呼ばし恩澤を領内よ  
りあつて民大に悦ぶ慶長十九年甲寅の秋由原の寺に師大官司  
お神殿再興と號し有るに辛酉年と聞かざる向天長七年庚戌新  
向以辛酉七年九年豊後代々の國を三十二年毎に再興と號す  
曰辛酉年乙卯重隆由原山神社を再興す同年重隆京泊より  
て所勞より大神君の許官を奉りて國を長男末女に重興す  
附屬す治府檢正年也和曰在府中他年みよ寺院再興轉移の事あり  
略し堀川と號し辛酉の馬一全ふ略  
曰苗末女に重興民徳編年  
六重矩有家督重隆長男母は家臣山田氏女天正十六  
年戊子に生元和元慶長二十二年  
辛酉十三年は元台徳より領田二万石を賜ひ同所の内を  
万石を給ふ又五千石を弟筑後守より賜有城田中島より一む重興長

臣不破彦左衛門等々領地餘り地三万二千石を行はむ同年四月大坂  
再乱重興台徳等々一太極山陣大坂屋去の後豊府より同年  
十月十六日父重隆京師より幸以茲後守京より使と豊府より飛ハシテとテ  
依之喪禮を有テ茶田所は野原名の内中京京師より遺骨と求ル日  
慈寺和尚導師法名回慈寺殿逸峯玄彼大居士回慈寺境内石塔  
建之元和二年丙辰七月日田城を石川と殿頭忠總君領地六万石と豊  
後田の城を成府内近江を五千石を賜ハル西沖濱村船利  
伊り以テ因テ石川氏沖濱を庫前と建テ地の長を日田領スル石  
米穀等の事目より心事成石川宗臣船越内匠助先社征  
大地主と以重母より  
依テ是と後山重興是より心一花後之事を沖の濱町長戸倉助為  
王官以石川氏より戸倉米五石石田忠義を多し元和三年丁巳由原宗  
再建成就元和四年戊午夏四辻中納言羅有テ豊府より左近守重興親

屬多姉背資徳一美成國壽寺の近き藝林中に管を有テ  
何呼々大納言と不此人和歌とよ〜〜若道の巻あり又よ〜〜瑟と  
彈す世間の瑟一弦と増々豊後瑟と不異名一是と彈す文略七年と経  
てゆたす  
豊府聞書より云同年藝州唐島の城を福島在馬幸正則隠謀し  
依テ信州川中島に流石唐島の宗臣如ク城壘と守テ重母及以  
を國諸將各命を有テ豊府より幸ハル軍議を有テ曾々  
重母福島氏と親あり故に重興密に和親を有テ諸將より  
先達名唐島より進玉城兵重母の智謀有と知り重母と我軍  
將とんとす重母聞テ大に驚きお中城と出テ船を有テ去  
諸將と議一又唐島より一僕を城中に入謀事と云和解を説ク城  
兵一曰云君命を侍すんは城を返さすと云因テ檄書と関東に走  
せと多し正則の書と御一謀者唐島の臣下は受け城兵納降一城を



出城郭を重具に返す各難散將皆國に歸り重具獨

り城郭の事を管一江府より台徳公に納す大稱臣と

なり歸國と云々私曰諸事深秘詔に上徳を以て城郭善後以てし其曲事とて

兩國に上津輕郡地とて下江出上使相電海管花房志摩を以て則  
以信治平酒井と内少播布多池原助廣を以てを以てハ云々ト云々ハ人教か幕奉  
奉奉多治平と多美治平と相平と内少播布多池原助廣を以てハ云々ト云々ハ人教か幕奉  
奉奉多治平と多美治平と相平と内少播布多池原助廣を以てハ云々ト云々ハ人教か幕奉

元和九年癸亥越前參議忠直卿後号豊後府内流罪曰五月七日秋

二石為備料五千石所之府城を重具に納す免於任曰五年より及

又七年より勅す年一は月付を交代也初進弟勅左馬助并左京亮府

内永池に居候重具の方方は内書奉定國是種千人長とて出く定後依

久間彦重忠秋右郎とて一む重具は三徳兼備の良將と稱せり

寛永五年丙辰忠直卿の館船の便約自由とて是江都より移り松島村と

津守村に移す曰五年己巳四月成就移徙あり固く是を衛す寛永七年

庚午の冬長崎の惣司役とあり重具長崎出勢の軍務を任を長

臣不破彦左馬特大怒曰重具の武功を以て長崎に郡莊の加賜を

却て長崎代官を賜ふ嗟呼中氏廢家近し有と云重具軍士を調

日十月上旬府城を落し長崎より改事を以てあり傍山山中古志為橋

惣若志河池佐々瀬等とて長崎より大の事を執りせ豊府より

寛永十一年甲戌正月市中重具に前長崎改所の役を能く自ら治す

と著修其多し因て科免し事を得ず是故に大猷云大老とて

重具曰嫡男源三は自殺の期を以て困り謀書を豊後に馳せ江府

に長崎江府より書を江守の監使に遣す二月日重具家老不破彦左

とを召て密謀て毒酒を飲守の咄二百是より為り彦左馬車以享年二十

二年長男不破大六は悲し城の母長宗福院に祈り家老三上権衛

と甚憫情す重具二月下旬江府より二月三日合命を以て同日午時

重無輝長男源三十九伏誦曰家臣兩士自殺重無輝弟中流守流形せしむイ基ハ武江流平慶養

藩幹譜曰重無私曲とはは古語在り中推イ基ハ武江流平慶養暮り所家の妻娘

杯と押取みせ外國より身をもつて治品と掃更村正の刀鉤を焼つる用意

の程を恐はせ誅罪せられしと云長文故を一二と

豊彦記曰忠直卿豊後下向之事引外く重無自命と云

忠直卿一謀言を告ぐ曰平五万石を領し西海探題たる者んを

徳因一五十万石は息越はるる残地一豊後大分を統率す居館

と據り招きすし謀言すと云

因一豊後後田城に中川内膳正久盛同州本丹城に山宮系を以て忠

知を以て豊彦城代たしむ同所津守監使とす一豊彦府城の事監守

しむ中川氏山宮系氏及津守監使承る三月三日中川家臣府城

城を父子自刃を告ぐ因一城中領内周章騒動す母家宗福院二

人の女孫を推重無妹重年本城に在下且も悼惜時宗福院に被六

回苗平兵衛彦五馬三上権左衛門大はら老一彦左馬嘯七す人は今此事を

談せん我七十あり存命し城を出入る如き城に死せん三上等及び諸臣

共々同一宗終宗福院に捧ぐ茲に於て不破三之戒衣を御國に傳

とす江府分は由一音隣部及び隣村に下知せしむ各者城急難に

時ハ中川山宮系へ援兵すとの旨傳ふる内接正を以て各軍務を細

居城を豊彦中川氏大分郡三依子陣す山宮系氏は生石村淨土寺屯

せんと御守不破申聞て大怒り白土を以て城兵証故に見佛山に陣せんとす

是情も亦一因て三上宗先山宮系を破んと軍備を以て志知に彼

兵士等城郭保つ時我兵淨土寺に屯せしは不可也と云し到て志知三

依りし内膳正は交會に敗軍支え鐵守不破三上等を鐵宰相

忠直卿一城の提督後へとせん中川氏の大軍攻事の時、府の防之城境  
に幾人雨て後市城に入禦し、自盡せん忠直卿とを聞徳大に初は城  
兵を移て城使の事と待城中叛心の事平有て不破文六を誅せし  
首を城使の首と曰十三日監使城士の僕の下に密に城中に入内  
平左衛門惣兵衛とある人、宗福の私親と云儀、昔市城にあり宗福  
没及ひ不破三上おとす一之城を父子既、自殺軍城を守り、益々  
且能く存命也、江府より、其後言と云、人死に、再は城と  
降る事有んと屢謀言を以て諫故監使の諫、隨し不破三上おとす  
不知く城使の治若事を破碎し、物又西の墨熟香此香皆出て焚  
燒す、曰十四日の初出城浄土寺に入居館とす、法平をを守り、法士は  
退散不破三上おとす、原おとす使者を遣て城郭を降す、因て中川小  
笠原監使者軍帳を調べ、存城に入内將士平、不知く城中を守り

一む不破三上おとす相残し、重隆の菩提のゆゑ大法寺と執り前主  
重隆の靈屋に石碑を建

牌名春岩院殿以松宗和大居士重貞治府す、事二十年  
同年七月大猷公以上治志國、西國及び法候軍帳を調べ、六月下旬、重隆  
赴任の旨令あり、因て重隆忠知上京中川之出、府城を守り、法平の  
監使者より、府城の事を監せしむ、同年十月十七日、根柢城に返  
京吉明五千石加増先知、幸石、於て石下、國主生、存城、お領、入部  
一泊、郷、出、給、成

日根柢、宗先祖は泉砂日根聖郡源永盛の苗裔、四代基遠、因  
勅命改姓、原、五世備中守澄經、卿法、平、益、宗、弘、就、息、男、信、州、諱  
訪、城、日、根、柢、後、終、正、徳、二、位、下、孫、平、吉、長、男、童、名、市、以、天  
正十四年丙戌生、お姓、源、氏、也、至、市、以、而、七、代、也、高、吉、太、閤、秀、吉、云

一萬五千八百石  
慶長五年庚子神君奥州征伐之時高吉誦訪城於頓死因  
之吉明知不々家科進童名徳を々生年十九年也々々

神君供奉初て下野國宇都宮を以て台徳公にお謁問する陣の時  
台徳公の命とら又居城し入り真田安房守昌幸と河内守長  
二年辛丑下野國壬生の地を得よ茲より一萬石 イモ一万五千石と賜ふと云ふ  
吉明の軍功も亦く故に城  
と成人の後叙爵職叙正吉明と号元和元年乙卯五月大坂の役

台徳公の先陣とて首級七ツ元軍功あり○ 城を借ふ壬生の  
の城を以て元和三年丁巳  
寛永九年壬申より台徳公大敵公日光法社奉還御慶吉明の館  
一萬石一萬石○ 吉明は元和元年丙辰十月より東照宮は廟社は慶長の時奉還す  
上野より戻るを和名をさす所吉明より後を継ぐと云々  
寛永十年癸酉大敵公吉明とて駿炮大将とす○十年甲戌の秋  
七月下旬大敵公上洛の時吉明軍糧を調へ供奉大敵公吉明の武功を奉

前知信一萬石を賜ひ豊府為揚城の主たり○忠直卿は終に成  
日年閏七月十日午時豊府津濱より召召口十二百中川久吉とて軍礼  
を中一豊府城より入る豊府に於て時後部正頼西監督使兼忠  
直卿を請す家臣川村氏とて守の事とす○忠直卿は向大村  
内直助河合孫五郎とて守の事とす○忠直卿は向大村軍固  
りて干戈備は田野多如財宝聚は是國の禍あり上礼とて  
事る下野とて守の事なり是國の禍災やとて寛永十四年丁丑方  
十吉明氏に赴くとて忠直卿を奉一十百江府より大敵公  
お謁問を命じ居城し入り真田安房守昌幸と河内守長  
不可也依て豊府より召召忠直卿の事とす○忠直卿は向大村軍  
事毎是と聞くと先達を命じ送還せんといふ板倉内膳正重昌と  
大将とて石一萬石直法と監推使とて大軍を信一急に召

赴しむ九州の諸侯皆公命を以て出陣一揆土民としても軍功を  
望む一を証ししに故に又軍將松平伊豆守信綱監撫使戸丸  
門氏健として板倉氏の援兵とす豊前志布野監撫使林丹波守牧  
野信房公命を以て去来冬豊前守事既一年を經て又多賀元進  
公命を以て豊前守事林丹波守事氏健の館を監り林丹波守牧  
野信房曰公命を以てしつとも隣國を以て戦場は民門の素意も此に  
遠く知れし進み諸將の戦功を監人とす軍事を吉明を以て吉明  
甚長て軍兵を興し信を以て軍糧を備豊前守事一を以て  
板倉重昌も退り丹波守事は馬田右衛門依陣も退り信花の綱島依  
濃守の地も入諸將軍飯一を以て花野守兵士として前降たりし  
十二月廿九日信綱氏健大軍を帥て豊前守公命を以て曰晦板倉聞  
て我軍器定免はしつとも大兵を以て身て屢謀計を運しつとも城郭

攻拔事を得ん遺恨限りあり然るも九州を以て事急急に悪徒攻  
拔ん時多事身以て武家の命を以て忍びす故に一戦の功を成し凶徒を攻  
破らんといふ力戦して死んむ事あり内接正諸將も去後一前接  
軍備を定免寛永十五年戊寅四月元日宣別内接正諸將も先達を  
氏勇を以て軍糧を進む城内一揆勇士三重金治内接正とて之を  
大将として御事一板倉氏と相て大砲を以て事一果して内接正の中  
り忽死を以て茲に於て諸軍士力尽くす如陣も退く曰元日宣別九州各  
戸内丸門守事も事も是れ内接正戦死を以て大に怒り甚だ豊  
前守將も命内接正の死體を以て知る者あり一其時監撫使林丹  
波守の士奈敷と南と云者豊前守城西永興村に生るる士性頗る俊  
しく吉明の吉年たり吉明の命を以て母信守も一を以て吉明の軍  
場も有る事あり曰我板倉氏の死所を知り依て軍事を副陣



居処を忍びしる公命を乞ひに遣ふ其末一刀を差し匠時を殺す  
豊府を降す志免んとす何ぞ虚しく陣を憚ん故明且易と城中に進  
め思徒と食と戦場を降らん我老年の幸なり河合孫左馬判官を  
勧て曰我有城を若くして再び古郷を降らん美の志を明に諸將  
先達を軍城に攻入る命を四郎時自ら盡ん命を於て諸兵おびを  
河合孫左馬判官曰熟考を極むる勢毛は重しと白明の何人我首と  
取ん時思真と恥つ吉明聞て思真を稱す諸將を前後軍備を定  
むる時は教書するを勅あり見達しは書と吉明の学を遣ふ吉明欽  
ておびを極む曰九妙の法城を早く把前を命を執る卒に成る福  
り豊府を在り堅く忠直を徹する一とく時吉明勇猛奮奮といつ  
し君命辞す知と降す涙流しを是後曰十四日辞を告て曰  
十八日豊府城を降す思真を留し且両監使に會ひ曰下旬山部軍

星根之因て曰九夜中思徒大勢出陣黒田の学に入糧米を奪は  
中陣を降す是時黒田の兵士を殺し自ら負死兵甚多し杉山権左力致  
しを死す曰九日思徒悉誅討大将四郎時自ら細川越中守兵士陣伏た  
と大戦を終り力致して死す初年十七歳依在馬時貞の首と九豆州本  
秘之諸將中陣を降す思真及び田石左諸將江府を降す其年春吉明  
長臣を説き曰府の命を福永氏に託す石を領し是より再び城を  
捕へ新より軍壘を築く未を功すありし吉明は中氏領邑及  
ひ領地三万五千石を自ら精く軍壘を築き府を降し一社社佛堂を  
修造す其功莫太なり其より中氏城境三方の口大門を成はし其東門  
樓を築は是西の門樓故学見と稱す因て江府の許命を乞ふ城壘  
の東西門を滅す吉寛永十三年丙子八月二十日吉明は教書あり士年  
下市坊を別しむは江府の許命を乞ふ八月十日日十七日と七日間新市

を以て長文故 年と重き無事す然とて日負なく江戸に所々  
と更なる定む海濱より淡の市と名づく寛永十六年乙卯六月  
海に波長し漲り日と夜市場を此の為り日の九段焼燈を吉明に賜ふ  
神輿両日とをぬきて還御を宣地甚寂寞なり故神輿も古きを祭  
らん斎田所の長き舟を以て其の市場と諸州より一日八月上旬より  
大坂歌を以て羊本戲俵俵及此所の高買渡の市場より一日吉  
より市場のふとく老販業をなす同十四日の時神輿の形様を以て  
此後殿より神幸を成す家臣より市場大なるなり吉明の命を  
以て市場を以て神輿より還御市場は九月終りて終り正保二年乙  
申冬吉明江戸より戻り同三年丙戌正月 大坂より駿馬を走名一輕船二  
艘と賜ふ又吉明より長崎及び西海路諸地より之を監控せしむ因  
て大坂より戻りて二艘の船とおもふに豊後府より戻り長崎定儀を以て

及び舟中の所人一二数人定儀九州に遣一國に郡より舟の危否を  
監控せしむ吉明自長崎に馳て諸事を以て所人の善惡を以て豊  
後より戻りて正保四年丁亥六月九日南宮尊委止鶴水修白二艘肥前  
長崎より戻り後弟東旭より奉命して高買を成人事と天下の大老に傳  
ふ船一艘は従は六歩横申而六歩高サ又一艘は従は二歩横申テ六歩  
高サ又二艘は屢大石火矢と稱故に輒く征一難一福高作浪守  
黒田右衛門依往年隔年長崎を以て因て西将急に軍務を以て  
吉明に馳て寧ろ船と學即使者を以て江戸豊後より戻り吉明  
聞て急を以て長崎中村氏河井氏より百餘兵を師て吉明に馳て  
黒田の命一寧ろ船と學細川氏の軍士吉明より戻り此取溜高作軍  
評して南宮は御宗より日本の寇敵也故に若干の薪と志高を以  
て後一寄せ可也吉明より日傍將の言不可は地は地を僅二艘渡人



大敵を北に死に白刃と交すすを禁殺せん、則ち後歳の嘲ををびす  
故に各艦艘を圍ひ其軍船を圍む江府の命をいへるを慶せん事可  
也是に於て瀨島河川各高橋の軍船を成す以て軍船を用ひ衛す前  
後の軍備を定む軍船の備は後くは多兵とて船二千艘を長  
崎の河口一百五十艘を連發 千五艘解拒立連發を叙上以大綱二條  
西涯大石取其艦船南本上覆也 南本上覆  
に船橋を成し高橋とて船橋の西涯に築く是の船橋高橋一夜中を成  
す黎明精兵數百人駿馬よりて船橋の舟を馳り南軍人を見せ  
む時南軍人主事の遣は成を見せ大に驚き二艘の軍船を夜夢  
を交ふ力と令せ石火矢を抛ひ桂葉の兵を軍船起すを待江府より命令  
し南軍人は驚き上つても未だ船橋を結ぬすの爲に唯南軍を交ふ  
事を求む然れ日域兵を起し是を征せは則ち甚ふ仁也故に軍船を連し  
ち西に歸しむる事可也因て南軍人曰後某日舟より事をも交ふれば若押

事の時必其人を泄さず是を保す事一先此處は其謀を看む早く舊  
國に歸る事一ふ南軍人命令を交ふ是を歡事限らるる一是よりして  
吉明おお儀へ其船橋の真中七艘を解余は軍船と個個の事を言  
ひ来八月言官船長崎の江と出帆慶安元戊子二月吉明は天下大に地震  
す後人歩む多し倒れしを土地に依る事安三年庚寅九月十日忠直卿  
津守の難事去来事五十六船流二十八年吉明監撫使に紙を飛復  
を江府に遣ふ大敵公忠直卿の死體と越後城を松平越後守光長  
に賜ふ長長公第五代危馬岡を以て越後一山岡伊織佐助五郎  
兼林沙守を南川上流を以て四兵衛守を赴く日十月十日表絶る事  
視て遺骨を淨土寺に安んず法号西嚴院殿慶安四年辛卯二月  
大敵公忠直卿公達松平代徳千代二人越後より賜ふ岡を越後守  
三處 豊府に遣ふ吉明監撫使五津守より彼并臨す不悉く燒く

西君信幸越後、還るに時吉明は海峯と云居を卒て供奉也  
明徳元年九月淡の市年、繁榮政市日と日給を増入事  
と破る許く許命と受て五十五と云む日七百九十九と云む  
明徳二年丙申三月三日吉明卒去享年六十一法府其二年于時  
長長議して養嗣と成人とす

牌名溪松院殿月峯淨覺大居士 四月廿四日 葬園壽寺牌碑建之

日廿七日飯田左門中村内匠助江着、其く四月中旬飯田中村の両士江着  
至る吉明の卒去と教有る、祈ふ于時大老儀して曰吉明の甥日根  
聖小助長男を報嗣と授く、兩士半助を考て吉明相善かり、故に是  
と受て依る吉明の弟河原左馬息男とて領地を方石を授け、  
舊地と易く吉明の弟河原左馬息男とて領地を方石を授け、  
事終兵士卒其領地を遺せ、甚不可也故に兩士放て釣命と受て以て

江を養是 私曰當時養子ナラハ家督トシテ 因豊後速見郡本府城と見 能松平市正

直好日出沖津城と本下伊買する後法とて豊府城代とす、高島左衛門  
津田平左衛門と高島左衛門の監撫使とす、山川藤右衛門、山川又左衛門と高島  
領地代とす、飯田河合桓重、國友儀と諸兵士卒其監領を承下、金  
銀米穀と供下む日九月九日、松平直好君府の北門を遺て、市城に入本下  
後法君府の北門を遺て、東門と越中村内匠助の館に入、監撫使及  
代官共府城に入、市正直好君府と命、府城の西門を衛す、伊買考  
後法君士卒とて、東門とや、高島左衛門は、飯田平左衛門府中、必以領  
地の事と監撫す、山川藤右衛門又右馬は、府内領地入貢、諸事と行ふ  
高島津田山川、府中、所の長、高島左衛門を召て、曰市場の日負と  
同初は、府中と、昔後、五年考と成す、左藤太お儀、一と曰中を、取て、若  
日と、府中と、是を許し、依て、八月十日、九月、日、給、多、給、監、撫、使、代、官

小市坊と号す八月十日前例より通律與伊幸城版図より還行同年  
十月廿八日庚辰山西意寺系八世中興開山祐蓮社念譽專哲和尚  
監撰使の許命と更堂宇と西意寺境内より堂宇師如母の像と安  
之明曆三年丁酉四月廿九日教有公令旨曰國白杵城を稻米系能也  
与信通豊存の城代とす松平市正君本下伊賀守君領地より帰しとむ  
因て稻米系位面君士卒軍務を親白杵と爲一府の東門より是  
よりして市正君後法君其軍禮を成し軍望を附守府城と出陸地を  
曆て本領より常より市正君領地と爲諸士より府城三口の門と  
おきぬせしむ監撰使西尾重長南天方より馬込代友山川友左衛門是より  
涉山萬治元明曆四年戊戌四月十五日一日松平左近將監忠昭君二  
万二千二百石府内城を領す部

先祖と号すも法和源氏後胤徳川和泉守源信先公嫡男實三男藏

人頭親志云二男松平加賀守常元君大給郷居在因世人大給の松平  
と稱す嫡孫源之中業揚君舎次左衛門親法君苗裔大給分室也  
二世近江君五九内門天正十二年甲申 神君北畠信雄卿の援兵とて  
秀吉公と合戦の時源氏の家系君幼少故近江君代友とて軍勢  
と率一踏江の城を攻破氏徳編年曰石川伯耆守 數正と相備る宗 翌天正十三年乙酉十月  
石川伯耆守數正君岡崎を立退の時近江君より恩を勸む近江君承  
引せし其使者を臣捕神君に敵す嫡子新法郎一生君の家業君  
の侍御居して神君に質とて送る苗言上數正君退散の時  
神君より一生君と濱松へ留む近江君二心を感し御刀を一生君  
に賜ふ近江君三州大給より 千五百石領すしり 天正十八年庚寅近江君より上野國群馬郡三の  
倉より五千五百石の地賜ふ家記曰五千石賜ふ 神君關八州ありぬの時 慶長五年庚子八月朔日  
伏見城在尚討死行年卒二十歳伏見城より討死す 年八諸書ありぬ故

法名 法性院殿松譽浄安大居士

菅野内膳中泥頂山浄安寺と浄土宗の寺に安主浄安を祀り寺号とす代々住持所也在菅野丹砂龜山在城の時建之國智の菅野連也再建之同為寺古跡也云

令室大久保之九郎某子女慶長十七年壬子五月十日卒去

法名 往生院殿

二世生君新三郎後又九郎也女婿男慶長五年庚子天下唯一

統の後進正其討犯の功を賞られ石賜ひ此聖物也聖物松橋を賜

小進正其討犯の功は倍々倍増の慶長七年壬寅五月伏休秋田に移すの付一

生君水戸の城とす軍功あり長文故慶長九年甲辰四月廿五日卒去

去行年三十一歳

法名 松盛院殿

進正其子数多あり嫡子一生君二男九郎也其正其君と号武功之人

也正其子也仁叙爵名棟守は任以知物不存元和九年癸亥

台徳公是上洛の供奉高松よかりて故有て改日三男某五百石を賜ひは旗本の流る台出され當時松平隼人某の先祖也余略と

令室押松平宮内九郎某子女寛永四年丁卯四月廿日卒去

法名 増上院殿

家記曰此一生君氏勇尖也の人まゝ生るる天物と或日光山に志す

とや傳唯今も日光山の傳説に其君の遠慮随神一社に新設

一生君と唱へ由る藩幹譜曰進正男二人嫡子也其後一生君

督を継ぐ二男子也其長正其將監成重の父也慶長十二年丙

午一生君在て所領を没収せらる何系の死也其後詳成事を記す

以又父子継ぎを承る程ありしかるなり

り因て混

三世成重君右を御坐一生君嫡男幼年より家督を継慶長十二年丙

叙爵右近将監下任す慶長十九年甲寅大坂冬陣の討松橋より出陣供奉於大坂水壘日向守勝成し五備首十二切て高名あり  
和若天下は一統の後元和三年丁巳去方石は如恩於合二萬石三河國  
西尾城と銘し七年辛酉二千石名は如増し殿六部合武方子也方石丹  
波國龜山の城と銘し寛永十年冬九月十日卒去行年甲寅年

法名見樹院殿

東武山石川傳通院境内見樹院葬る高家墳所也  
令室安藤討馬守重信君女室也永三年丙寅三月十日卒

法名華林院殿

再室松平因幡守康元君二女久松依後守松俊二男伊若尾同胞の長女則神君の姪也  
寛永二年己巳十一月十日卒此廣當耐城東松村久松庵より曹洞宗

法名久松院殿

四世忠昭君太政大臣の孫成重君嫡男  
初年より高智成人の將叙爵右近将監迄永承二年甲戌豊後大分縣  
より二万石を所領し信守の地也領所遠見郡大分縣直子郡同年閏七月  
廿日一本遠見郡通川村より松本より大分縣中川村より松本より松本より  
回十二日廿七日移居一本寛永十六年乙卯七月日松本より城學移之  
萬治元年戊戌二月廿七日台倉より信守の地を領し四月十日一本卒  
松橋より信守の地

一説曰此忠昭君の歌道執心をもて此曉園の將監とせし名を得たる新主人  
首より歌入り程の人より龜山在任の写初より上り一室上方子孫の如入  
魂守りし事高家を承りし事如増し殿六部合武方子也方石丹  
延宝四年丙申三月廿七日改任不道して法名如圖と号す元禄六年  
癸酉九月十日卒初年辛酉年卒七歳

法名賢林院殿

令室酒井下院守忠政君女正保四年丁亥四月十日卒去

法名芳心院殿

元禄三年依教舍子針政近鎮子千五百石分知公儀子武州

埼玉郡の内子千石お領部令子五百石也 分知千五百石、弟知の内  
千石、破老由五百石、八、新田也

當時云々 天保年中西海丸以山細大松子信次郎君先相也同年三

男市正昭政子新開の地五百石分知公儀子下院州之内子

千石お領部令子五百石也天保年中松平左内是君先相也

依之妻地二万二千二百石也

五世昭重君初近陣筑前子為子為家督二萬千二百石室永三年乙酉

十月十日依教隱居法名如元君と号

享保四年己亥十二月十日卒行年八十二

法名謹真院殿

令室阿部為子為重次君女實文七年丁未十二月十日卒去

法名真善院殿

再室板倉内接正重禮君女室永七年庚寅九月廿日卒

法名靈鷲院殿

室近禎夫阿波守為子為權子家督二万二千石享保十年乙巳八月

十日卒行年六十二

法名大智院殿

令室<sup>杉</sup>杉平紀伊守源典信君女貞享四年丁酉五月廿日卒

法名慶林院殿

七世貞貞君正權正為馬守実三宅備前守康雄君二男室曆七年

丁丑九月十日卒行年六十六

法名雲暗院殿

令室養父近禎君女享保四年己亥六月十一日卒

法名眞性院殿

八世近形君主膳正

安永二年癸巳六月七日卒行年八十一歲

法名觀光院殿

令室牧野因幡守明成君女室曆三年癸酉八月十六日卒去

法名玉成院殿

九世近傳君長門守明和七年庚寅七月五日卒

天保十一年庚子二月十六日卒去行年八十四歲法名大乙樓不騫法名光澤院殿聲譽譽花月不騫大居士葬東本武石川傳通院內見樹院

令室松平和泉守常務君女文化十一年甲戌三月廿六日卒去

法名輪光院殿

十世近義君主膳正實近傳君舍弟文化元年甲子十二月廿日卒

丁卯八月廿七日卒去行年四十二歲

法名淨岳院殿

十二世近訓君起之助左衛門尉實近傳君男文化四年丁卯十二月廿

日卒

令室石川多敷頭總師君女

十二世近信君信濃守實富山松平溪邸守利幹君二男天保二年

辛卯二月廿日卒

令室養父近訓君養女實近義君末女

近信君天保十二年辛丑三月廿八日卒去行年三十四歲

法名寂靜院殿顯譽普照俊雄大居士齋戒寺淨安寺

白柙城

海部郡号鼈背城

永祿六年癸亥大友宗麟居居城（一）之築之居昔八丹生島と云  
後系の地成加き文祿二年大友宗政易曰三年甲午太閤秀吉以豊  
後國と云七人（一）死當尚城ハ初福原右と勅直と云六万石（一）領入部

實大田系  
資清三男

福原の祖ハ那須忠常宗隆一族也那須家ハ信望関白道長公の  
曾孫須美権頭貞信の後胤有り貞信初知つ所之國那須郡  
を領す貞信之代の孫那須右を資隆十二人男子あり忠常宗  
隆を控ま男也之代の孫刑部太輔資氏右大將家の命を依て  
沙汰所と兼り資氏十三代の孫修理亮資晴天正十八年豊臣  
太閤奥州より高資晴り領故有て悉く滅一彼一族宗人亦分  
ち興小願大田系大関福原育玉聖也野千三系と云く是より

福原右馬助直高太閤より一朝鮮の敵に軍監の役と當り海を

芝長二年丁酉六万石は加増被給也五万石賜以同國首領也

四年辛酉太田形源守源重正（一）三万五千石を領す

平氏白柙  
之を以て母子柙を居り朝鮮陣之に軍監七人虎の内高麗南門の

城を守る軍功有之故云（一）慶長五年庚子関ヶ原陣後

退城（一）氏家盛衰記曰太田政之とあり領三万石と云三州後風去記ハ政信と

あり芝考五年石田三成は興せ一か同國密城を申川修理亮重成

東國方故白柙の城ハ押寄金藏形源守ハ是奴の大力又富屋子大井

何左衛門と云太田より方々ぬ割の者ありて防はれ申川勢毎各利を失

小地より関ヶ原敗北の沙汰聞はれ太田政之は急を返電すと云

関ヶ原陣後利運天下統一統の後慶長

氏鑑二二五年  
城之譜二二七年稻葉左衛門直通



君関々京軍功よりして其石余お領侍従に任し當場入印

元祖、伊豫國の住人河野重信十代の後胤強正少弼越智通直一説

末子通高始出家を遂げ安藝國安國寺の法弟也河野家系裏

微塵せん事と憤り還俗して美濃國より當國の守護土岐山

城守定政に属し美濃縣の河野重信と改稱重恒重と其名を系圖に佳瑞ありて福重と改稱重山有故名なるも亦や

其子傳中通則より息六人あり當國枚田の合戦に通則並子

息五人同時討死す其六の男八知年より出家遂んと長良の

崇福寺の法弟とす八知の時より十七八歳と唱食より

通則の妻を呼ばし還俗させし家を継後伊豫守良通

三世良通君伊豫守内室西三条殿女良通氏男の眷属とす

男の三人と其名を呼ぶ初當國の守護を弟通三に属し承徳七

年の辰龍身と云和成城田上総助信長事属す元龜元年庚午

信長公上洛の時、良通君近江路の勢國を承りて息長系亮貞通

君共守山の宿に在陣す當國の凶徒蜂起信長を渡んとす父子

馳向い戦て首一千二百余級と取て信長公に奉り曰六月姊川合戦の

時神君信長公の抜兵とて出陣す時信長公誰を以て勢より

つとまきし、神君は良通君を携りて、是を良通君一士の名譽

とす六月廿日良通君神君に傳ひ後陣を勤む軍功あり信長

公に氏男を感し諱を賜ふ長通と傳良通君是を悦ぶす已

り名を貞通君と傳りて、故て道鉄の本一族と号す美濃縣白土村の河野重信と其名を系圖に佳瑞ありて福重と改稱重山有故名なるも亦や

天正十二年甲申、神君秀吉公と合戦の時氏男の名

譽あり曰十三年乙酉秀吉公一決入道と三位法印に任す天正十六

年戊子十二月九日行年七拾三歳卒去

世貞通君右京亮伊豫守内室西三条殿女良通督龍興女天正十

三年乙酉太閤秀吉公貞通君と從四位侍從に任す此時貞通の居る  
左後河内郡上八幡の城と賜り領四万石お領慶長五年庚子の秋  
関ヶ原の陣の時貞通君并伊弉多の使者といはれ方々の一と  
訴ふて下は統の後郡上八幡を歸但も慶利累代の侍領たるに  
遠藤一賜ひ貞通君より豊後國臼杵城を賜ふと加増ありて  
五万石余とお領慶長八年癸卯重勢妙心寺内知勝院より卒行  
年五十七年

五世典通君彦六実貞通君金吾内室本下三任法中紹吳君姓也  
典通氏男の養父御方より家督の後從四位侍從に任す大坂  
の陣の時領國ともいふ陣より及守實永三年丙寅十月十九日杵  
の城より卒行年五十二歳

五世通君臣部少輔實永四年丁卯家督内室細川越中守忠母君女一

通君實永十八年辛巳八月十六日卒行年五十五歳

七世信通君能知寺守留田守後田兵部左衛門信良君女明曆三  
年丁酉四月九日卒行年五十三歳在書方法元年戊戌同國より  
松城より松平左邊將監造昭君引渡之延宝元年寛文十三庚午  
九月五日六月卒  
年五十六歳

八世系通君左衛門亮承應二年癸巳十二月九日叙爵左衛門近宝  
元年の秋家督内室有子玄蕃改称利君并系通君永禄七年甲戌  
閏五月廿九日卒

九世知通君能知寺守留田守海白佐浪守重雄君女  
十世恒通君能知寺守伊弉多内室  
十一世董通君能知寺守伊弉多内室有子玄蕃改称維君女  
十二世泰通君能知寺守

十三世弘通君純孝子丹波守子伊賀守道

十四世雍通伊豫守下総守實政十二年庚申九月家督内室有子

中務右輔頼貴君女

十五世尊通君伊豫守

十六世幾通君辰治子実舎子後叙高備中守文政四年辛巳十

二月家督内室山松平土佐守豊資君女

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

佐伯城 海部郡号鶴城

鶴城ヲルヤト  
唱成タル也

相半礼也ツカハチ  
ト訛轉セシヤ

大友四家元佐伯彈正大弼大神惟教入道宗天来地三万五千石食邑  
地也文祿二年大友改易後地之詳一説曰太重正城之謬云居城ツルヤト曰古平村  
助店領三方石大友没倒後云和名云家名云云云云石知りテ大坂陣の時討死す云云

大邦君天下統一統の後毛利伊勢守孫宗言四君方石有領入部

元祖八字多天白皇太子教実親王後胤佐々孫左近将監成頼

十四代難江備中守高久之八代赤松左馬尉高次婿男源姓

赤松氏後改称赤松姓毛利氏

高政君は太閤秀吉公の出家人ト云初赤松八ト云太閤未筑前

守ト云世討毛利右馬次大江輝元相伝ト云戦天正十年壬午六月

羽柴毛利和睦ト云人質を取替す毛利の掟有甲元彌子桂氏

於方城を居て出ず秀吉云ハ高政之弟と違ハス云後同日出の城

此ヶ条長州毛利  
家譜ニ之由傳

玖珠高年礼城  
大友家後居之  
姓名略

其後輝元卿高政君兄弟曰毛利森田則を以て後  
兄弟の物を結ぶ一毒件諾して毛利は書改豊臣天下統一統の後高政  
君兄弟召返さるゝ叙爵民部少輔に任ず朝鮮征伐の時軍監と承り  
濱海大友家没倒の存立保二年癸巳豊後國佐伯の城を以て二万石  
とお領是年丁巳の戦功著せり所也日田玖珠二郡を領り九万  
石の事地を以て豊後七人衆の主人也関ヶ原陣の時毛利高政君の日  
隈の城代は家臣毛利隼人佐也高政君は大坂に在り関ヶ原を以て通す  
中津城と黒田如水入道関ヶ原を以て豊後を惣ふ日田の城家  
人栗山甲を左馬頭と大将とて一攻り城代隼人佐曰五人高政を大  
坂に在り関ヶ原を以て隼人佐曰五人高政を大坂に在り関ヶ原を以て  
城代隼人佐曰五人高政を大坂に在り関ヶ原を以て隼人佐曰五人高政を大坂に在り関ヶ原を以て  
後の人々知れ召放され一は高政君の領と賜ひ一は高政君の領と賜ひ

玖珠の地性形の外除て二万石を領一は高政君の領と賜ひ一は高政君の領と賜ひ

因定本曾免馬頭義政女武田大膳妻時信 當時佐伯討内二万石公料より毛利家  
入道信玄去孫 頼り二本文預り外は地可成也

武德安民記曰朝鮮陣軍監七人衆の内佐伯城と毛利高政と有之慶

長五年庚子関ヶ原陣を以て此人日田隈の城を以て有同年の一乱九州記及

武德安民記を余の軍記に豊前田河部山倉の城を毛利高政に勝信

降年并因於香春の城を毛利高政に家老毛利九郎元忠を以て長子

幸なり其後伊勢守と云異名鬼氏部と云勘六の時切末八石二持

秀吉公より賜ひ尾州天領を以て運左馬を討て二百石知行す高

麗陣以後亦石を以て明石に任ず其後豊後日田の内を以て二万石

と賜ひ其後二千石加増ありて高政を以て父の毛利九郎元忠を以て

信長に仕へ三百石を賜ひ其後高政を以て父の毛利九郎元忠を以て

信長に仕へ三百石を賜ひ其後高政を以て父の毛利九郎元忠を以て

丁酉年賜以勅八弟九弟在為吉安之家督を傳、別系當  
柳川候藩中森九左衛門  
ヨリ吉安未裔云

二世高成君勘八郎根津守内室依之間備前守安政女高成君家督後  
寛永九年壬申肥後國熊本の地を守、如藤江守、 日十月廿辛行年  
三十一歳

三世高尚君伊勢守初市三女内室牧野依治守親成君妹也高尚君寛  
文四年甲辰八月辛卯年三十四歳

四世高重君延宝四年丙辰三月廿六日叙爵安房守に任す初に藤内  
室内田出羽守正衆君女也高重君天和二年壬戌四月七日卒

五世高久君初負陸河守実久為高信濃守通法君三男内室南  
越守信濃守初信君女也高久君元禄十二年己卯五月十三日隱居  
西申四月十日卒葬依伯龍岩山養聖寺  
法名南昌院殿前陸州太守泰雲紹慶大居士

六世高慶君勘解由周防守実久苗島通清君五男 実舎元禄十二年  
己卯五月十三日家督 寛保三年癸亥九月十三日卒葬同寺  
法名澤林院殿前防州太守了山惠覚大居士

七世高通君十郎根津守 享保十六年癸丑七月廿三日卒葬同寺  
蘭溪院殿前防州刺史  
内室

八世高立君寅太郎周防守実嫡孫兼祖高通君男  
内室知在母信守忠暲君女也 宝曆十年庚辰三月十日卒葬同寺  
法名蘭院殿前防州太守

九世高標君彦三郎和泉守伊勢守 享和元年辛酉八月七日卒葬同寺  
法名眞龍院殿前防州太守  
内室加藤加賀守兼衛君女也

十世高誠君岩三郎美濃守享和元年辛酉九月家督  
前室、美濃川左衛門 寄惠氏君女ナリ  
内室京極守以守文君女也 寛政九年丁巳正月廿七日卒  
法名梅葉院殿花華妙高大師

十一世高翰君榮三郎出雲守文化九年壬申五月家督  
内室井伊右京守直朗君女也

十二世高泰君伊勢守天保三年壬辰五月家督  
内室龜井大隅守茲尚君女也

竹田城 岡氏云 大野郡

大友能直七男童名二五九号大友志賀豊前八郎能卿入道信舜  
從父能直賜分領豊後國岡築城居之  
母白柏子 朝倉入道女氏

讓狀曰

豊後國內大野郡志賀津田并高田名地頭職中之事嗣渡文書亦  
所領大小依得分之多少嫡子親秀依為總領可令支配也各隨嫡子  
命深相親着於今違背者作所領田畑亦可令返進領掌也又無違  
背之義者任讓狀不相違可令領掌知立狀如件

貞應二年十一月二日

前豊前守藤原朝臣判

母當風早禪尼讓狀拾五通有之略目錄豊後國大野志賀村半分地  
頭職嗣渡銘 田畑家註文餘略之

延應二年四月六日

尼深妙判

能郷

童名二王九  
志賀豊前八郎

泰朝

太郎藏人  
豊前八郎

忠能

藏人  
入道正雲

能長

太郎藏人  
入道正久

氏房

童名孫太郎  
志賀日向守

親理

童名鶴壽丸  
太郎藏人

頼資

二郎  
新藏人

親明

童名千徳丸  
民部太輔

親賀

童名龜鶴丸  
民部太輔

親昌

太郎八郎  
山城守

親家

童名松丸  
太郎藏人

親泰

童名太郎  
常陸介

親毎

藏人  
入道道雄

親益

志賀太郎  
入道道輝

親次

志賀太郎  
中尾工門尉

親勝

志賀少輔  
号意樂

親谷

志賀湖堂門尉

文祿元年大友義統朝鮮征伐出陣親谷随順出陣日二年大友家於朝  
鮮陣中怯弱依之義統安藝中納言輝元被預家没倒親石浪と成  
諸州離散空城と成文祿二年中川修理左源秀成爲領入部七万四百名差  
出高一本慶長十年乙巳捧領入部共首

中川家の古とを尋くると其祖は平姓とて桓武天皇の信胤孫とて  
將軍平良之とて六代の孫孫文下野權守重純の三男高山三郎重  
遠の末孫とて代々常陸國に住す重遠の時より都より又移河  
國に赴く當國多田源氏より馬耐清村の末葉中川左馬耐某養  
子として娘を娶らせ其家を譲り依て其姓を以て源氏となり中川  
佐後守重遠と稱す  
大関平秀吉  
公任自也

二世清秀君滋濃天正元年癸酉十月將軍受昭卿織田信長とて

平城の時尼ヶ崎城を荒木権守が村重子属一藏田家の味方ありて將  
軍の將血江の國甲賀の住人和田伊勢守惟政摂州に出結一五六の要  
害に憑て荒木と合戦す惟政猛將とて五六も又二雙の要害故  
荒木攻る事能はず或時惟政要害を離て平場は陣す清秀君  
其懐心を察す一見物に中川滋兵衛和田伊賀守を討て大文字  
に書口放て廣言一翌朝の戦は終り惟政を討取せしむ氏名天  
下より一々一太閤記氏原最詰 ○ 平田幹清より後川の事をいひ理依一討取あり  
感状記の記あり ○ つらとらを成を知り同年より清秀を討て者 天正五年  
戊寅十月荒木織田家より首を伊丹花隈河本を概ホの城より  
軍勢を多く揃え荒木の城に清秀君并石田伊豫守流達  
勘定を多く守りしむ清秀君後田家より降りて十月高野原  
勢を逆へ石田流達を逆射し荒木より城に軍功莫大也といふ  
信長公の御感深りしに河本の城をあるに其日 系圖には父と記し初

河本の城を搦て池田勝入る属せし見ゆを河本は信長公  
成下は城に元來清秀君の領せし所なれ信長公元の供よりいふ也  
是處幹清の記あり 天正五年壬午五月秀吉公高野の城を攻の時援兵として  
清秀君明智長宗池田おと山陽道の先陣となりて橋本國清  
かゝり六月二日信吉公父子都布能寺に明智光秀の為討て  
秀吉云山陽道より馳入り尼ヶ崎に會合し信孝相伝を始れ丹羽  
池田おと軍評定し一光秀と謀せしむ清秀君二陣に定む河十  
三ヶ峠の合戦し先は惣て光秀の軍勢をお破り光秀河本討死  
す今日の戦ひ功第一なり三七級自ら清秀君のものと云へ今日の功い  
つのでかゝる忘んし後と流して作らる此時秀吉公罵り宗元は滋兵  
衛おとるを過す清秀君を是と見ても也荒木を天下と云ふも  
んと思ふを既し面を顯せありと云程多く河本は河本の軍勢も明



天正十一年癸未二月法秀君秀吉公の味方とて近江國志津嶽  
ありと余族の湖の邊に陣と加佐之間立藩改盛改一法を秀吉公  
攻草日赴きあひせ勢よく上岩の堀未乾す堀越の法は太勢討を  
自身越へて戦ひ終り近江を一つ居計しぬ内室佐之間立藩以  
改女

三世秀政君孫を南村信長公智君とるされ播磨國三木の城を  
賜ふそ存太閤殿下は徳川叙爵右衛門左衛門と稱す  
本領は一花松岡東の軍に徳川文相元年壬辰相野陣の時王城  
根付と  
攻入水原とふ所は要害と構て守りぬ文相二年癸巳軍の討を  
くし借人少し引果し放るる一とて相野の伏兵の考に討死す生  
年二十五年秀政君の事  
大明のまゝなり家人おたむるを有の儀より上り太閤の威氣  
を快くす法家必ず滅ぶとて全儀し秀政要害の城郭捕へ

考子自ら當り地形を見たり時相野の伏兵を過すを致死と言上  
す

還秀成君修理を實合太閤則秀成君三木の城を賜ふ

秀政君の嗣とて一為す此年癸巳年  
癸巳ナリ五月大友民統罪あり豊後國

轉封、トカリ  
文祿二年十一月廿九日入

別圖と成りは内室おたりし此年三月の春南部領地七万石を  
守親賢入道紹忠家係掃部助統方と天閣より中川の守力と居

せらま城下より移居せしむ秀成君叙爵修理を稱す初名小吉  
即文相四年乙未相野に法海大明の兵と戦ひお破り自身も痛手  
負ひ鳥名を頭と稱す大閤薨るぬ慶長五年庚子秋關原  
軍起す時秀成君初秀稱す忠義を盡さん石垣系合戦に大友  
民統が加勢とて田原紹忠家係統方は法炮三百挺弓五拾張其

天正十一年癸卯二月法秀君秀吉公の味方より近江國志津嶽  
ありと余族の湖の邊より陣と取佐之間玄蕃次盛政に密に秀吉公  
攻事より赴きあひて勢よく上谷の堀未乾す堀越の法王太勢討事  
自身赴きし歟に終に近江より居り討事の内室佐之間玄蕃次  
登女

三世秀政君孫を搦耐信長公智君とるされ播磨國三木の城を  
賜ふに存太閤殿下に徳の叙爵を由門を主と稱す法王は見下如斯の如  
一昔六父の徳とついで  
本領より元禄元年壬辰相野陣の時王城  
に攻入水源より所より要害を構へて守りおとし元禄二年癸巳軍の討事  
くは借人少し引是に放るるより相野の伏兵の考に討死す生  
年二十五年秀政君の事  
大明のまゝより家人おたむるを有の儀より元禄六太閤の徳氣  
を快くす法家必す滅ぶと全儀に秀政要害の城郭捕へ

考子自ら當り地形を見たり時相野の伏兵を逃すを致死す言上  
す

還秀成君修理を實合太閤則秀成君三木の城を賜ふに  
秀政君の嗣より癸卯二年  
癸巳ナリ五月大友民統罪あり豊後國  
陶園と成りりは内室おたむるより三年の春南部領地七万石を  
中田の城より秀成君お領しおたむる君  
秀成君初年より田原近江  
守親賢入道紹忠宗係掃部助統方と太閤より中川の予力より  
せらま城下より於座位せしむ秀成君叙爵修理を稱す初名小吉  
元禄四年乙未相野に法海大明の兵と戦ひお破り自身も痛手  
負ひ鳥名を頭より掃部守太閤薨るる慶長五年庚子秋陶園  
軍起す時秀成君初秀赴き忠義を盡さん石原宗合戦より大友  
民統より加勢より田原紹忠宗係統方は法炮三百挺弓五拾張其

勢五百餘人きりり大友軍討つるも石田三成敗れし  
よの裏返す如く関東の西方より臼杵城を太田形保守ハ大坂方  
成加是と攻め功を以て関東へ居せんと臼杵城へ押寄せり一本秀成君関東  
の東方より  
勝一合戦は丹生島城を太田形保守の城と攻むるに一年を引具へ臼杵へ押寄せり之に  
よて田原沼津遠流方より各人より中川の旗押し池田公を以て途中より引返大友軍統帥は  
よて之を押し寄せる中川家とす 斯て石垣弟より大友軍討ちて宇保統  
方の討死一を統帥は生捕り大友軍人悉く離散す田原沼津ハ今度の  
軍も死せざるは是と思ひり此中川家人五五人同船より伏見  
より下る舟を以てせめて徳川より舟を以て臼杵へ後見馳よる事なれば  
合戦の最中を以て初服とすもあつて思ひ伏見関へ出逢ひ中川家人  
中川左と吉田長を以て侍より舟を以て舟より舟を以て臼杵へ寄る事とす  
是夜ハ関権現の社内陣を以て居りし所におも中川家人は狼藉の  
人あつて伏見関近辺の野山は有牛と云へ関権現の社の前を以て焼て

喰ひ酒を以て軍の首途殺れり云々云々の儀は魔術を以て以て  
彼の火を以て以て一熊煙十方は蓋社標より民屋を以て一府の煙り  
成りしり是代末圃の分野也社司は氏等と見えて臼杵の城早船  
て中川家人并田原沼津お伏見関の関口より揚て権現堂より火を掛民  
屋を焼拂ひ狼藉の如き事一は太田形保守の家人石垣沼津内  
橋本傳兵衛お三種少く引具へ池田を以て舟を以て中川家人田原  
沼津お都合二百五拾人志生味へ懸つ所を地下人も洞倉山左衛  
長り鼻より待てりおよく鉄炮を打懸り中川勢を以て事とすお松  
く通る勢味の下り早よ石垣沼津内橋本お伏見と懸て待てり一序は  
と起立道さし一は戦中中川勢を以て防られは石垣橋本危く懸  
見しより又臼杵の城より戸井田左衛長を以て三百余人引率一後見馳  
よ掛り橋本懸りおれは中川勢一もせり坂中より討倒され一人お

らに討てり三人軍を 中間を兩人漸く遁せ斯と去く休田留  
 と旗の者方をおるを白旗の陣に退進す中川開て作天一連襲とす  
 休田甲を焚きし召忍り中途より引退大なる一隊一々敵に休  
 忍美心成るあんと世の讎も晴るやと申ひ先如水使者と全  
 二心成るや備召忍り不義の怒也と陳謝これ水も別依は存を  
 以ておるをり中川此上は白旗の城と云ふ一面目を備へんと差  
 たる方便をたれも三方より攻めり唯一橋より忍んと攻めを城中分  
 ち砲を撃と打掛射魚防きたる休田勢を心を挫く見たりとも  
 要害を敵の城成りて寄りし討てり更し可所松ありされたる  
 橋より及ぶと引退遠攻より終りたりと云ふ事濃州  
 敗軍の由聞れば戦い詮れり太田城を開く中川城より  
 休田より勢とたると秀成君は去十七年壬子八月十日辛未行年

四十二歳

女久盛君秀作内膳正内室松平 隠岐守源定勝君女寛永十年甲  
 戌二月日國府内城より中宋女正重信故有て改易の跡は者城上成回國  
 本付城より多系正守忠知君と一白に任付此の同年十月日根野織  
 部正吉明特領入部引返す承徳二年癸巳三月十九日辛未行年  
 二十一年

二世久津君山城守内室石川正經頭志總君女也寛文六年丙午四月晦日  
 隱居入道入山より天和元年延宝九年丙午 十一月十九日辛未行年二十七年  
 七世久恒君伏見守内室白河 松平新右衛門光政君女也元禄八年乙亥六月  
 月十五日辛未去

八世久通君因幡守元禄八年八月廿日富智内室洞井雅樂頭志津君女  
 九世久忠君内膳正富智宝永三年丙戌三月豊前中津城より多原

修理大夫長胤君不行西有之知行四萬石之占上小倉候に及給て元禄  
 十三年庚申嫡子信濃守長圓君四万石之下先知家督長田君卒去  
 嫡子造酒助長筈君家督早世を嗣子勘純享保二年丁酉金秀  
 喜三郎長興君に三萬石之下播州安志に所替に作付依之中  
 津城を及久忠君仰を及り近國の大名より人教備免出之城上  
 取同年四月の六月と初り同日より丹後守河内守と奥平大膳を及  
 昌成君に拾万石之下中河内守替に作付引給之  
 十世久慶君山城守実誠松平安藝守吉長君金秀  
 十世久貞君修理実誠松平伊豆守信祝君二男  
 十世久持君修理実誠松平伊豆守計頭久徳君二男  
 十世久貴君修理実誠松平甲斐守伴元君寛政十年戊午二月家  
 督内室長松平伊豆守信明君養女

十世久教君修理実誠松平伊掃部直亮君金秀文化十二年乙亥九  
 月家督内室養女久貴君女

森宮

玖珠郡

康親君

後長親

東島右衛門允

諱後改長親

慶長二年辛丑豐後國日高郡球珠郡連見於三郡之內賜之方甲石球珠郡入於攝津郡為左給

久苗島祖者人皇七代孝靈天皇元二皇子彦狹鳴命賜號藩屏

將軍近江豫州越智郡當國守護職為押領使稱嫡子越智宿禰為

家督押領使号伊孫尾形十代号河野伊孫子玉澄是河野家五代

出雲守好方天孝二年中孫地友進意書國守國攝遠保等九代河野中良通

信信和源氏伊孫子孫系未男十代河野彈正少將通直先祖より此の家を

島十八家豫州東山洲中二城路有之是年島田氏也遠祖孝

靈天皇元孫州大三島勸法尊崇三島右衛門為氏神于今三

十日市有之云々三州三島豫州之勸法と云々

通直君

河野彈正少將

元龜三年壬申八月廿六日卒

法號龍德寺殿前霜臺海岸希清大和尚

二世通康君

始義武

右衛門大進

又大和守

後出雲守

實信濃村上家苗裔村上右衛門大進義武浪落之後赴豫州依河

野家義武數度有戰功然通直君嫡子晴通河野六郎父

子不和及弓前事不讓家督二男通宣左京亮早世三男通

真河野四郎幼弱愚不継家督二十四年卒去天正十九年丁亥

七月十四日謚長昌寺殿月溪宗圓大居士故義武為養子配家

女與諱字家致系圖示合継河野家因河野出雲守通康以之

永祿十年丁酉十月廿三日行年四十九歲

法號大雄寺殿前雲州太守洞屋了仙大居士

葬長州大坪大雄寺當寺開基也

或記曰

字祥年中通直妻依二為二人未知其真偽因使僧巫及隆陽師寺屢為祈禱無驗乃置之于別室誠之吉喉時一婦有怪形直神扶問即古狐也將殺之方決時四國中群狐來集于門前曰狐貴狐上云者而日本國中吉草之也殺之則災難立所三可至領賜則會通直曰自今後皆不居于我領國則放去之群狐曰謹諾乃書誓紙捧之通直受之免長狐誓紙今在河野氏家云々

女子 養子通康君室天正三年甲戌四月七日卒

法舞 桃源院教春庭宗榮大姉

三世通總君 河野助兵衛 後改末島出雲守

住伊豫國末島 秀吉公以後所被呼故号末島出雲守秀

吉公賜豐臣姓依之通總君一代者論旨亦豐臣姓也之策

策陣之時有戰功 秀吉公感美之賜以末島 小

田原陣之時為船軍之先鋒賜印朱印如難之時賜印

朱印字兵船大明人保赤國南京城通總君環城攻首四

字一得之從 秀吉公賜感狀又叡山之戰自破敵兵得首數級

賜感狀其去元年丙申九月十六日於水原自取取敵船當前

戰死于時三十六歲

法号節嵩院殿前雲州太守天與常清大居士

葬 豫州風早於安樂山大通寺

四世康親君 後改長親 末島右衛門

慶長元年丙申父通總君於朝鮮戰死同年終

秀吉公賜遺領翌年康親君赴朝鮮曰六年辛丑從神君改伊

豫國賜豐後日高郡球珠郡達見郡三郡之內一万四千石球珠郡

森捕郎為領其去十七年壬子三月十六日卒行年三十一歲葬

森大通山安樂寺

法号大滋院殿前金吾雲山玄龍大居士 森玄初代也

今室福島左衛門右主三則君養女室姪水野之右衛門忠正君女

慶安三年庚寅五月十五日卒東氏貝塚万葉山青杉禪寺

法号玄興院殿全室玄提大姉 森建玄興院開基也

藩幹譜曰右衛門依源康親八累代之忠祖河野之被官と云々

家記曰  
通總入國、初菩提所  
大通山安樂寺後當  
所跡安樂山大通寺  
号、由於朝鮮戰死  
因大通寺花中埋遺體  
遺髮不詳之

伊豫國の任人也土佐國の任人長曾我部り起りよ及び土佐守  
元親阿波澄俊と雖々天正四年丙子伊豫國に葦向一戰事  
凡七年四十年壬午と云々河野通春と始りて三十一人の國人  
お皆長曾我部り降り妻島侍居侍居たり是より後甲子日  
十三年甲辰秋元親も又豊臣氏に白も降り本領の事も土佐  
國を知らず河野澄俊伊豫國を以て收めし元親も降り  
國人お悉く申國と云々却りせし事も山内元親の領を賜り  
を氏南を我々云々云々○妻島助兵衛方四石侍居を以  
て為り三石を以て其家を惣智氏とししも氏家補任し  
りて源氏と云々其家の系圖と云々いすて詳成事と知り  
り又氏家補任り妻島に村上と云々と記せり徳章記を見  
朱雀天皇の時天正三年は伊豫國の任人惣智押領使

好方系系統友進討の字と云々云々村上といひ者書  
國新に在の郡大島に流されて年之りり海防の業  
と知りし人なり其好方相家よりいふて是れを云々  
其好方貞治の頃河野の家は徳島の村上に在り是れ  
弘田尚長門守といふ者あり是れは村上といひ好方といふ  
勅島ゆきと云々村上の事もいふ先祖あり云々是れ  
○和日本文家記所見也  
城に備日通春祖父出雲守通康より云々の時徳島に  
て是れ方四石を賜りて其陣中より年以て時通光四石  
系出陣後浪り多し其後井伊掃部頭達奏し御君より  
豊後國に於て是れ方四石を賜りて○和日本文家記有  
之通康君は康親君通光君と事を見



源平太平記評判四巻白河聖家の事ハ伊豫守源朝  
茂四男伊豫権介通隆河聖家御將を嗣せし甲斐通  
信ハ八幡太刀長家の甥也源氏の正流○和通隆朝後  
甲斐長子信下左兵衛督成リ一延文三年辛亥十月奥州  
夷賊平均ノ勅を蒙リ下向あり則ち奥州の二方あり云々  
平家之を思存余を遂に殊ニホ素時以テ脅あり片  
時も急ぎ鎌倉ノ馳馬人と號を解ケ河波國等々を越  
テ然れど浦を漕新りて多ク難於大坂を過ル云々  
河聖家代ハ和の秘卷有テ平家之秘術を承ケ又浦ノ  
の漁人ハ推古天皇の御宇より河聖家僕ト云れり是ハ角  
の折也ト三文書の和字を見ケり早く推古ノ潮のほ  
味ハ漕入ト云り順風ノ帆を列儀で九月廿六日鎌倉ヲ至リ推

新りて云々○和曰先祖ノ傳セ有リ云因テ記一ト云也  
日本評曰河聖ハ神功皇后ニ韓退治の時拾人の大將軍  
トシ海上の先陣也云々ト代ハ和法傳書云々天仁年中  
純友と臣信○推古天皇の御宇百濟新羅より倭人を大和  
ト日本ノ攻メの時河聖益躬倭人を討テり日本和月威  
の論旨と如シ東海西海の漁人を家業ト一和の覆き法  
と和ハ和名右衛門依朝臣兵の時も南海を經テ和名推  
新平ト云敷の言名ハ依テ源平矢島の合戦赤間壇浦の  
軍又ハ弘安年中蒙古陸軍の軍皆以テ河聖氏海上の先  
陣ト稱間ト云々○和曰因記之年  
太閤記曰赤島足代トあり豊臣定信ト赤島助之助トあり  
宇佐美定祐ト重樫朝鮮征伐トありト赤島出雲守の通

康文祿二年六月廿三日朝鮮の元均と戦ふて討死せし事  
をくもく記せり按て大河内秀元、記を見くも孝考二年  
大明の和親破きて後再び軍起りて吹巻島出雲守海  
防の先陣承りて八月十五日南京城攻屠し時て妻島り  
多し首級百二十一切し詳し記し然れども元禄二年の雲  
守討死せし事之を孝考三年の朝の人数孝考臣と隈島と  
一定するんも孝考三年の朝の人数孝考臣と隈島と  
戦ひし時又順天海口より陣隣と戦ひし時の事しや正し  
て此等の事しは傳し傳しせり傳聞の及ぶ所を大略を記し  
○私日布文家記詳なり  
又曰元禄のまゝに朝鮮征伐の事起りて孝考と西元海  
防の先陣よりて徳田と押後り於所て軍功戦死関ヶ原

陽陣の後康親を領安堵しきり○関ヶ原記に妻島九鬼と  
形を浮く東海のはく浦へ押後り兵糧秣を奪ひて上方の  
城へ入りて孝考をいりて押後り領安堵せりいりて孝考  
も故あらずしきり○私日因記に孝考

世通春君 始正次 越後守 後丹波守

幼少而継家督大坂冬陣之時出陣西陸房侍奉帳に孝考翁と有夏陣之時

陸西の人々を陣元和二年丙辰改素島書久留島

寛永十五年戊寅正月島原耶蘇宗門一揆より出陣本付城より

差取を以て忠知君一召集る城在るより千五百人にて固之明

暦元義島四十年 四月十三日二月十日卒去行年四十九歳葬同所安樂寺

法号 安祥院殿前丹州太守素雲健康大居士

令室依久間備前守平安政君女寛永九年壬申三月廿六日卒

葬東氏二本根廣岳院

法号 華兵院殿天空妙香大姉

六世通清君 始通繼 信濃守

家督通春嫡男方四千石舍弟亦所領分地平八郎某千石因方乃子存

石也元禄十三年庚辰九月十九日卒于時七十二歲葬安樂寺

法号 瑞雲院殿前信州太守信岳道範大居士

前室中川内膳正源久盛君養女室松平信濃守定真君女慶長

三年庚寅四月廿五日卒葬東氏淺草龍宝寺

法号 寶樹院殿理安妙香大姉

後室山松平土佐守忠義君女元禄九年丙子八月朔日卒葬東

氏白銀紫雲山瑞聖寺

法号 松樹院殿壽清元高大姉

七世通政君 初通厚 伊豫守

享保四年己亥十一月十三日於東氏卒行年九歲葬瑞雲

寺

法号 檀嵩院殿前豫州太守用中道昌大居士

前室戸澤上総介正職君女貞享二年乙丑九月十五日卒葬

東武三田常林寺

法号 海岸院殿月泉流清大姉

後室松平土佐守豊昌君女家記曰養女和曰氏鏗三豊昌君女分地一俊治印大史婦

元禄十三年庚辰三月十七日卒葬東武谷中運久寺

法号 本学院殿瑞應妙等大姉

八世光通君 初通綜 始靱負 後信濃守

實分地久留島修理亮通貞君三男丹波守通春明和九年

甲申九月四日於城州伏見卒于時年一歲葬安樂寺

法号泰龍院殿前信州太守活水淨湛大居士

令室木下伊賀守豐后佐量君女享保十五年庚戌八月廿一日卒東武瑞聖寺

法号皎月院殿桂室淨香大姉

九世通祐君 信濃守

寬政三年辛亥四月十日於伏見卒于時年三十三葬安樂寺

法号泰清院殿前信州太守敬山寂照宗奇大居士

令室太田撰津守資俊君女明和七年庚寅十二月廿二日卒葬瑞聖寺

法号松操院殿貞林衍節大姉

十世通同君 出雲守

室記曰實通祐部屋任側室出生光通養為子為通祐舍弟家督實通祐男也

實通祐君舍弟寬政十年戊午八月三日於大坂城中卒行年

三十一葬大通山安樂寺

法号瑞龍院殿前雲州太守廊翁湛然大居士

令室島津但馬守久柄君女通同君卒後号法雲院

十一世通嘉君 伊豫守

寬政十年戊午七月家督

令室安藤長門守信馨君養女實舍兄圖書信廣君女天

保四年癸巳六月廿六日卒葬紫雲山瑞聖寺

法号妙操院殿松室貞秀大姉

豆田城

日田郡

抑日田の縣を天地開闢より嶺嶽廻連一地形空て為茶の  
 一溪水集流一湖水洎湛ゆる水面凡東西百有余  
 町南北二百有町也崖涯高々松柏茂一狼狽吠て人跡稀  
 也地神才立耳不令尊末年より大倉湖上より中湖  
 陽の光より和一忽然とて天より昇る湖より動一大洞  
 を起一崖岸を洗ひ大地揺て雷震の六と一南岸須  
 史より一崩れ湖水漲く流を盡て平地一成一河有て三  
 岡を現す則天の三光一擬す日は陽性あり故に南  
 有と日の隈と号以月ハ陰性なり故に北有と日此隈  
 と号以大白星を車より出故に東有と星の隈と号以平  
 原ハ新より各一京一卦を顯す又七方一節達あり双

岸より一崎嶇中狭通す故に七節達と号以何に七瀬と  
 云是也其後京師より石井氏山崎氏堀氏武田氏北田氏  
 勅命より修て豊後より来りて此地を開闢一郡名を日田と  
 号す一郡内と号て三郷三庄と号す所謂雪野一曰理郷  
 有以大山庄五馬庄大肥庄是なり石井氏ハ西宮姫子の事案  
 より石井源実高明と号つて日田郡より其の事案より  
 因て村名と号す後館と大原と号すて作居一四里の傍境と  
 宜之土地の干熟を監り溝渠を穿て用水を道一産田  
 を并き農業成る事一む五穀豊熟一一人肥白の顔色  
 あり高明大に喜悅して郡名に多郡と号之又自名を改て  
 稻積と稱すなり

大藏由来

先祖は地神 五代清平公尊号三白皇子其貌鬼形に傳  
りて因て祀砂然聖大荒古の指故に大荒善撞鬼と名つ  
るは喬豊前彦山に位する七年後日田郡彦山に居り  
其末孫沖境鬼大蔵氏鬼藏を以永弘と云仁寿元年祥  
四年未記勅命となりて日田郡司に任てより大荒弘隆に  
至り八世云々

隈城

文祿三年甲午豊後中掾地後日田郡故公田と云一宮  
本長次を以日田郡代ありて日陽山に旧寺あり龜前  
山真光禪寺と云長次命を以寺と他の地に移り寺跡に  
新に城と築く隈の城と号し所を城下に移し隈町と云

以後未詳

豆田城

慶長二年丁酉川を以守光氏改築之後毛利伊勢守高  
政君玖珠郡高牟禮城と西城あり所と云城代毛利隼元  
建見郡横灘共支配豆田城に居一本隈の城其長五年庚子  
秋豊前中津城に里田如水軒之道園法君豊後國中関赤  
の海方に背り軍事を以悉く征伐し毛利家八幡方と云  
少勢あり城を以居りて是日ある老栗山四代左馬と居  
城代守其長六年辛丑同國府内城之外中伊豆守重信  
領地と成り其長十三年戊申内掾地あり奉り得島法台  
則左郡に在り物成改役人高牟禮左馬と居り其長十八年癸  
丑と所居亦詳元和三年丙辰石川と居り忠總君美濃國大垣

城方豆田の地を移す日田改移建見三郡の内を初め六万石  
三郡の内推地有之當時村々所持之推地八元和八年壬戌内  
推地の帳也是ハ大久保相州改易の時志徳父子の城王護六日田村  
氏鑑其外元和元年内宮堀尾軍刀吉晴君娘寛永十年  
癸酉二十一年下総國依倉城、所督寛永十一年甲戌江州膳所移後  
五万石を勢州龜山に移減知し御寺解分地寛永十年法當城  
成豊前中津城を以て系保津守長次本舟城を以て系保  
以て忠知天交代領一本志知天ハ寛永十年一十一年共首又志知君護ハ日田十一年  
久盛君と交代と有之一年分是城一寛永十六年己卯天代友川系  
利君領り城高言松城廢城上成今の陣屋城也一本言松と文  
と十年

寛文六年丙午より天代友山田津左馬利信日休内三郡を  
信就居之山利信ハ日田改移三郡を統率し信就ハ高言松領主也日田改移申上  
年高言松直後助高言利信と交代國成三年高言松は山利信ハ日田を統率  
寛文十一年高言利信は高言松と交代延宝五年丁巳九月十日天代友三

田津左馬利信天代日田高言松支配之天和二年壬戌二月  
十日と云々年辰之同年八月より高言松子大和守直矩君七

万石より播州姫路分領に移す日領十五万石是ハ松平直矩後高言松長君  
の家領也日田村也或曰高言松は高言利信の弟也高言松は高言利信の弟也  
の事あり直矩君高言利信の弟也高言利信は高言松の弟也高言松は高言利信の弟也  
州少形、所督一本天和丁直矩君日田一居領と云々高言松は高言利信の弟也

貞享三年丙寅法代官山川左馬利信日田監吉左馬利信天代友川  
高言松の事あり直矩君高言利信の弟也高言利信は高言松の弟也高言松は高言利信の弟也

元禄元年高言松の事あり直矩君高言利信の弟也高言利信は高言松の弟也高言松は高言利信の弟也

元禄十一年高言松の事あり直矩君高言利信の弟也高言利信は高言松の弟也高言松は高言利信の弟也

元禄十一年高言松の事あり直矩君高言利信の弟也高言利信は高言松の弟也高言松は高言利信の弟也

九月分又古記是為前由代友兼常令在馬門日田高  
松之配豐前由料字依那由代友岡田莊兼其配所之內津  
考中組西組水組四組之內二万石余高松附由代友室古記免  
由之配と成一本正徳三丙戌九月十五日正徳三年癸巳八月迄拾六年支配  
之同年九月分由代官南條金九馬門下向日田高松兼支配正  
徳四年甲午七月廿八日高松引後日九月金九馬門高松着  
支配之享保元正徳六丙申九月十五日九月十八日金九馬門病死故日田由代  
友室古記免其高松兼支配之享保二丁酉六月廿八日由代  
友池田古記免其日田高松兼支配之但南條金九馬門  
門支配豐前宇依郡之內二千九百九石二斗六分由豐前  
中津城之由古大橋左馬昌男君相領其公由古記免其  
五万七石石余其日田享保五年甲子六月廿二日由古記免其

國之五萬石余増地也其高松方古石余之成日九月大附高松  
建之并前之由成由許永荒島再改享保六年辛丑四月  
村鑑帳由享保七年壬寅十二月日田改珠兩郡之內二萬石  
余其分其支配之享保九年甲辰八月由代友増田多兵  
由交代日田高松兼支配之日八月下旬日田到矣享保十年  
乙巳五人組帳前並文言改之據地有之享保十八年癸丑迄支  
配之享保十九年甲寅夏分由代友岡田莊兼其交代日田  
高松古記免其實保二年壬戌と其配之實保三年癸亥  
分由古記免其倉城之內其系古記免其忠基君形其延享四年  
丁卯と五年其配之延享五年戊辰分由代友岡田莊兼其交  
交代日田高松兼支配之室曆四年甲戌と七年古記免其  
年夏分由代友岡田莊兼其配之





高松城 大分郡 始有松

此有松をもちて醍醐天皇出御時連見郡野田村赤  
湯に浴せんとて豊後津江の有松を知りて  
帝宮を海中に敷つて云々の所を地以て松と  
有江の樹上をたて舟の舟を待依て有松を  
此地に碇碕山大寺ありは館の妻と云松おと  
醍醐天皇の廟あり是より後人勸修すは赤湯の  
西岩に古傳の草抄傳ありは天皇を安んずるに  
越前一伯卿領料五千石事

越前二伯中細末康卿嫡男三議忠直卿重名長吉  
九家督を長十六年亥年春 將軍家の法前と云松  
御諱字を賜ひ四位少将古三河守に任りて其年將軍家

第三姫君勝姫 此方へ来りて越前國へ歸りて再九才一才十二才正益天崇院

林言 元和元年号二十二年 閏六月十九日從三位多議に任り其後

悪行重り元和九年亥年五月十二日豊後萩原之流死

且月日近赤松右衛門左衛門亮之孫年々其代略

有内城を市中末女正重次郎り贈料五千石連見於大分郡二

五千石と云ふは元禄の御 於て入道号一伯卿後津江を移寛永十寅酉

年竹中重次故有て依律同年日根堅後正吉同府内城

有領入部 是は一伯卿領りて命を

或記曰萩原の邸四方大堀を幅二間程寛永三年丙

寅津守、夢傳出年移之為介階女中三人に付て

人の妾於蘭及と稱す如き人之所至家老之世但守内

室也是人の於氏具是ハ豊後同領一人ハ於系 慶安三年

庚寅九月十日於津守約年五十六年逝去法目付地見寺  
丸島内依一丸島内日根野織部正吉明勘定河村七之助長  
為見分真田長兵衛越後守老堀三之丞長尾用之依聖子  
奈山岡伊織之守見分之上回國語之系津土宗見佛山淨  
土寺之葬了法名西巖院殿相善蓮友大居士回寺法重前  
より大葬并慶安四年甲三月留守居河村七之助分領料  
五千石村三高杉代友小川又丸島引渡之料と成津守の  
郎七反と取五四歩坪敷五十八百拾四坪高七石五斗五升九合上  
即系圓壽寺之より取之存之以前之地之割付に付  
寛永十六己卯七月大松平左近將監志昭君城を築き居  
万治元戊戌年四月府内城を領轉移  
寛文五乙巳年細川越中守綱利君御此系廢城と成治元

寛文六丙申年分法代官外四三の位に就言和別段  
取之右掛郡廢城と成是より以前に取地日田分兼取地有之田  
載寛文九己酉年分法代友近藤左衛門左代友紀之寛  
文十一年亥年分法代友山田清左衛門利信日田言和重日田  
支取之近宝四丙辰と天和二壬戌年八月九日分松平大和守  
直矩君領内と成貞享二乙丑年と分言三丙寅年分徳  
官之取之考丸島と取地而と成元禄元戊辰年分日田法代友三  
田法代友一子と分日田言和兼取地と元禄五壬申年分  
法代友小長五助左衛門日田言和兼取地と元禄十一戊寅七  
月分法代友五と分丸島内日真金丸島内分代日田言和  
重と取地と正徳三壬辰十二月言和兼取地内大分取地  
見郡國東郡三郡之内より取方三拾五石九斗六升

四合八月日田延岡城之牧野備後守成英君相領正德三  
癸酉年九月豐前出料半依於法代友岡田莊左支  
配所之内津房中組西組北組四組之内二万石余高杉附成  
代官室七郎左馬之支配成正徳四甲午年法代官南條金  
左衛門高杉支配之七月廿八日高杉引渡日九月金左馬高  
松房享保元丙申九月十八日廻在中与畑村高杉病年日十月  
十九日並柳村高杉病死年申迄三十七年支配之日年十二  
月分聖享保二丁酉年六月之法代友室七郎馬高杉亞  
日田高杉配之日年法代官池田森公高代日田高杉高杉支  
配之享保九甲辰年八月分法代友増田多高代日田高  
松高杉配之享保十九甲寅年分法代友岡田莊左支法代  
日田高杉相兼支配之享保三亥寅年分豊前小倉城之

小笠原右近將監忠基君領所之成延享五戊辰年分  
法代官岡田莊左支配所之成室高岡甲戌年分法代官  
岡田九郎左衛門日田高杉相兼支配之室高八戊寅年分  
法代友揖斐十五甲日田高杉相兼支配之安永元壬辰年  
分法代官揖斐富次郎支配之安永五丙申年分法代  
友揖斐杵五郎支配之安永七戊戌年分法代友揖斐靱  
負支配之天明六丙午年分法代友揖斐造酒助支配之  
寛政五癸丑年分法代友秋原孫五郎高杉配之高杉陣  
至居於尤強之勢下向高杉元打高杉高杉分佐原高杉  
日田高杉高杉石高杉高杉支配之成延享高杉高杉高杉九  
百四拾石余之如合高杉三万三千二百九拾石余寛政六年  
甲寅五月分法代友高杉孫五郎支配所之成寛政九年

丁巳五月丁酉改代官淺岡彦四郎支配所と成寛政  
十一年己未八月迄三十二年支配之同年八月至代肥前  
島原城主松平左衛門治忠馮君預り所と成同十月引  
渡此所支配高島以前之通八月丁酉十月迄乙付後系  
彌甲申方彦甲辰此右役所相成同年八月分松平左衛  
門忠馮君預り所と成支配二十月分當時支配高島萬  
三百八拾壹石餘云々

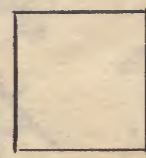
豊城世譜 坤終

凡本藩之紀事不為詳也  
雖於本付世紀簡易之嘆也  
尚志設雜可餘閑五口辨懸  
而不暢古跡史論之遺志特  
亦友氏之治象與曆而已水家  
於象屬之知也惟是永老人

豐城七譜纂言中一證畧之  
要亦屬之事一實錄然可見旨  
意人名志確字知鄉一弓龜由遷  
居州學舍一恒卷乃不願他之  
毀卷求從漏亦載藉採秘奧  
於限漸謂二難示我予嘗有好  
古之癖定之而曾不棄然其不  
平之字句亦孔而茲亦接性  
余此文涉獵遠方而不於敘  
通暢而不俚又古人暗記國君目  
擊與廢謂曰美備哉子曰後世  
可畏焉古事在之亦如今如母

子如豐陽志亦在彭守

村城隱士清原克辰誌



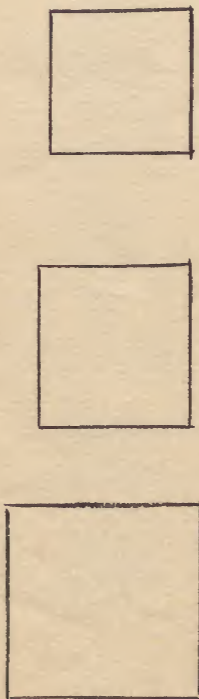
Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '子如', '豐陽', '志亦', '在', '彭', '守', '村', '城', '隱', '士', '清', '原', '克', '辰', '誌'.

Small handwritten mark or character.

天保五甲午中冬上旬編集

天保十一庚子晚春增補於

彙樂園隱栖永吉雄寫



乾坤二冊之内

明治十六年四月以火分縣奉謄寫于  
地法課中



